

縄文文化の北方適応形態

Jomon Cultural Adaptations to the Northern Environment

福田正宏

FUKUDA Masahiro

はじめに

- ①縄文文化の範囲
- ②ロシア極東との関係性—近年の研究動向と論点—
- ③縄文文化の北方適応形態
- ④完新世初頭の北方適応形態
- ⑤縄文集団による北方寒冷環境適応

【論文要旨】

縄文文化は、温暖湿潤気候と山岳地形に由来する箱庭的景観が特徴的な日本列島の環境に適応した、極東型新石器文化群のひとつである。縄文文化の担い手が分布する範囲は、寒冷地適応の限界と関係して、列島北辺域における温帯性の延長線上にある生活域にとどまる性質にあった。居住環境が必要条件を満たさない場合、縄文集団は適応困難な北方寒冷地に積極的に進出しないことが多かった。そのなかで道東北は、海産食料資源や石材資源が豊富に存在するため、縄文集団にとって占地するメリットがあった。しかし、オホーツク海沿岸では極端な気候変化が起りやすく、温帯性の生活構造を維持させることが難しく、撤退を余儀なくされることもあった。また、温暖環境の拡大ともなって出現したサハリンや千島方面の適地に縄文集団が進出／占地した可能性はある。しかし、完新世初頭以降縄文晩期に至るまで、そうした動きは一過性であり、生活システムを転換させてまでして、新たな生態系に進出して、持続的な適応を果たしたことはなかった。気候が亜寒帯に近づけば近づくほど、縄文集団の居住要件は満たされにくくなる。つまり、日本列島北辺域に分布する亜寒帯性の生活環境は、縄文集団にとって進出するリスクが大きい地域であったと指摘することができる。

【キーワード】 縄文文化、北海道、ロシア極東、寒冷地適応、環境変動

はじめに

ロシア領も含む日本列島北辺域は、日本国内他地域とは遺跡の密度が異なっており、とくに縄文系遺跡・遺物の分布が薄い。そのため、他地域と同様の手法で資料操作することは適切でない。今ある資料を系統的に分析した上で縄文時代全般の人間活動痕跡の濃淡を包括的に捉えることが、現時点では生産的である。本稿では、列島「縄文」の範囲の捉え方について、一例を示したい。

縄文的生活構造は、北海道各地の適地に浸透した。が、周辺の環境が必要条件を満たさない場合、縄文集団は積極的には進出しなかった。オホーツク海に近い道東北には、海産食料資源や石材資源が豊富に存在し、縄文集団が占地する利点がある。しかし、気候環境が厳しいため、時期によっては生活構造を長期的に持続させることが難しかった。

道東北における縄文文化の分布は、寒冷地適応の限界範囲の拡大縮小の変化という切り口から説明することができる。その適応の限界は、温帯性の延長線上にある地域にとどまる性質にある。気候最適期に、サハリン方面や千島方面にも適地適地が出現し、そこに縄文集団が進出／占地した可能性は充分にある。現時点で離散的に発見されている縄文土器、もしくはその延長線上で捉えられる土器は、そうした集団の存在を暗示しているのだろう。だが、近年充実してきた現地の遺跡情報に照らしても、そうした動きは一過性であり、縄文集団の進出／融合が起こった後、新たな変遷が開始することはない。これは、気候最適期のみならず、完新世初頭にもあてはまることである。気候が亜寒帯に近づけば近づくほど、縄文集団が指向する条件を欠くようになる。縄文集団は基本的に、日本列島北辺域に分布する「亜寒帯性」の生活環境に適性がないと考える。

①……………縄文文化の範囲

日本列島は、温暖湿潤であり、複雑に入り組んだ山岳地形に由来する箱庭的景観が特徴的である。こうした列島の環境に適応した極東型新石器文化群の一形態が縄文文化である、と筆者は考えている[福田2015dなど]。ここでいう「文化」は、大陸では一般的な土器文化としての考古学的文化とは別次元のものである。大陸基準を下敷きにする大貫[2008・2010]のいう「縄文文化」に近いものであるが、筆者は、縄文時代の諸現象が日本列島に内在する環境に制約されたという側面を、より高く評価している。

新石器時代の日本列島では、複雑な地域生態系に即した形態で、地域ごとに細かく分化した生活構造が成立した。それらの地域集団間では、大小さまざまな規模の移動や情報伝達があった。大陸新石器時代でも、同様の集団移動や情報伝達は、当然存在した。列島集団と大陸部の集団との間で、行動力に本質的な差があったとは考えられない。

定着的食料採集民の集団が移動する動機のひとつに、気候変動や自然災害など、生活環境の変化・悪化に対するリスク回避がある。幾度となく起こった非常事態において、縄文集団は移動先として大陸側の地域を選択していない。大陸—朝鮮半島に接近しやすい北部九州でさえ、縄文時代を通じ、列島側から半島側に積極的／大規模に拡大した痕がない。資源交換や生業技術共有といった面で、列

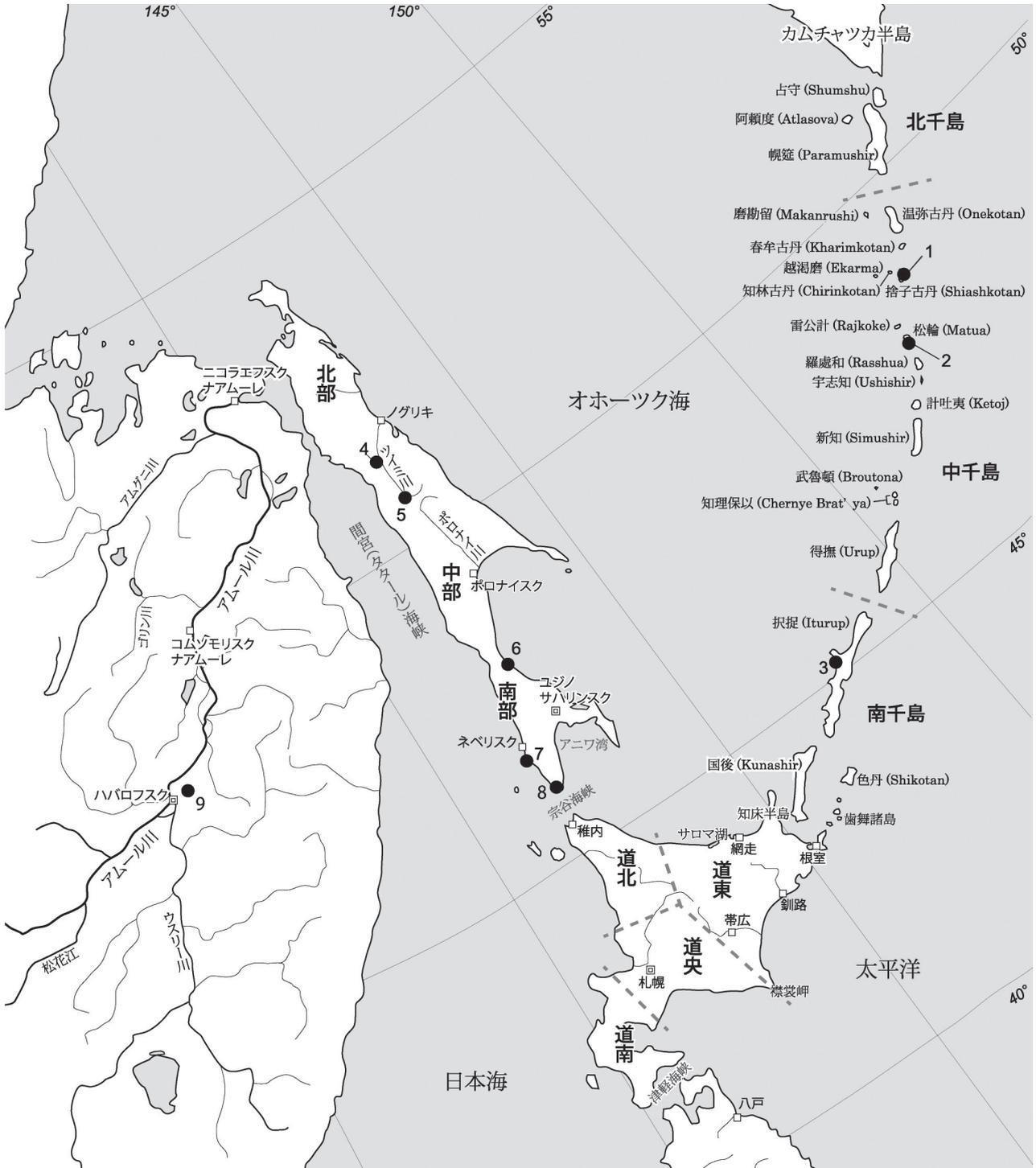


図1 本稿で言及する地域と使用する地域区分(サハリン島内の地域区分は図2を参照)

[遺跡名] 1:ドロブニエ, 2:アイヌ湾, 3:キトボエI・ヤンキト2・クイブシェフカ川, 4:アドティモボ2, 5:ヤスノエ8, 6:スラブナヤ4・5, 7:ゴルノザボーツク2, 8:クズネツォーボ3・4(宗仁共同牧場), 9:クニャゼボルコンスコエ1

島は外部に完全閉鎖されたことはないので、大陸に接近する地域集団は彼の地のことを知っていたはずである。にもかかわらず、列島諸集団は大陸側に定着しない。言い換えると、縄文集団にとって快適な生活環境が列島内にあり、列島外に移住しなくてもよい、あるいは移住しても利益のない状態だったと推測される。

②……………ロシア極東との関係性 —近年の研究動向と論点—

2-1 ロシア極東の新石器時代区分

最初に、北海道の北に連なるサハリン島とアムール下流域における新石器時代の文化変遷の概要を押さえておく。大陸内部と日本列島の間を結ぶ位置にあるサハリン・アムール下流域（図1参照）は、後期旧石器以来の列島北回り文化論で注目されてきた地域である。

ロシア極東で現行の新石器時代時期区分は、気候変動や環境史的画期と一体化している。最初期は、更新世／完新世移行期となる。完新世に入ると、寒冷ピークとその直後の急激な温暖化が1470 ± 500年周期で8回起こったといういわゆるボンド・サイクル [Bond et al. 1997] が、世界的に確認されている。これに準拠すると、前期は完新世初頭（8.2ka 寒冷化イベントを含む）、中期は完新世最温暖期～4.3ka 寒冷化イベント、後期はそれ以降に、おおよそ対応する。

紀元前1千年紀になると、東北アジア規模での大きな変化と関連した社会変化が生じ、全体的に paleometal epoch が起こるとされる。鉄器の普及・影響と必ずしも関連しないという地域性を重視して、青銅器時代、初期（前期）鉄器時代とよばれていた時間の現象群を読み替えたものである。⁽¹⁾ 時間的単位として地域の実情に適しているため、ほぼ時代名として定着している。そのため、筆者は「古金属器時代」と訳している。なお、新石器／古金属器時代の移行期的様相が強まる前2千年紀～前1千年紀前半の間のいずれかの期間は、新石器時代晩期として区分されつつある。

以上の時期区分は、行動様式が異なる千島／クリル諸島やカムチャツカ半島を含めた東シベリアには通用しないが、サハリン・アムール流域・沿海地方の先史社会経済の発展度を測定可能な目安として使われている [福田 2015c]。

日本では近年、高精度炭素年代測定値とともに、完新世の気候変動と縄文時代の構造変動を対比した議論が増えている [安斎 2014 など]。ロシア極東の時期区分は、日本側のこうした画期論と比較しやすい。両地域は日本海を取り囲む地理的關係にあり、環境変動の波動がある程度同調し、それに対する適応形態や各種変化が相似する [福田 2015d]。つまり、ロシア極東の新石器初期は縄文草創期、前期と中期の一部は縄文海進最盛期にいたるまでの縄文早期、中期は縄文前・中期、後期は縄文中期／後期移行期以降に、ほぼ並行することになる。一方、新石器晩期と古金属器時代に関しては、説明が難しい。ロシア基準の社会経済発展の概念上では、晩期が縄文晩期／続縄文・弥生移行期、古金属器時代が続縄文・弥生に対応するのだが、当然のことながら、ロシア側と日本側とでは変動の実情が大きく異なる。そのため、年代はまったく並行しない。

2-2 アムール下流域・サハリンと北海道の関係性

筆者が今持つ編年観では、アムール下流域に、新石器時代初期:オシボフカ文化 (ca.13000-10000 BP) →同前期:ヤミフタ文化 (ca.8500-8000 BP) →同中期前半:コンドン文化 (ca.7500-6000 BP) →同中期後半:マリシェボ文化 (ca.5500-4500 BP) →同後期:ボズネセノフカ文化 (ca.4300-3400 BP) →同晩期:コッピ文化 (ca.3400-3100 BP) →古金属器時代:ウリル文化・ポリツェ文化 (ca.2800-2000 BP) という順序がある(表1参照)⁽²⁾。空白期間が多く残り、今後も精度を高める必要はあるが、オシボフカからポリツェまでの文化変遷の大局はほぼ確定している。

サハリンでは近年、油ガス田開発事業に係る遺跡のモニタリング調査や記録保存調査が進められている。島のほぼ全域におよぶ調査により、新石器時代の遺跡情報が急増している⁽³⁾。未詳の空白期や調査の行き届かない地域はまだ残るが、全体的な文化変遷はロシア極東基準の時期区分に即して捉えられる [Vasilevskij et al. 2010 など]。

サハリンの新石器時代前期には全島域に分布する無文土器や条痕文土器が出土する遺跡群、中期には全島に分布する宗仁文化(トゥナイチャ式土器も含む)、後期には南東部に分布するセディフ文化が設定されている [ワシレフスキー 2006 など]。サハリンの北半部の新石器文化として日本でも古くから知られてきたイムチン文化 [Shubina, Zhushchikhovskaya 1986] は、数千年間というきわめて長期間に属する遺跡群を包括した、非常に大きな文化であった。現在は存続期間が短縮され、中・後期に属すると考えられている [Vasilevskij et al. 2010 など]。そのうちの後期には、アムール下流域

表1 アムール下流域における新石器時代～古金属器時代文化編年(2016年3月現在)

時代	時期	¹⁴ C年代(yBP)	遺跡と層位	スレドネ・アムールスカヤ低地帯(南西部)	アムール河口域(北東部)	
新石器	移行期	[12000-9000?]		オシボフカ	? [ゴールイムイス4?]	
	前期	[9000?]-8500		オシボフカ系	?	
		8500-8000	ヤミフタ1-III層, ハルピチャン4	ヤミフタ		
		8000-7600?		?		?
	中期	7600?- [7400-7180]	クニヤゼボルコンスコエ1-II層	コンドン	古段階	マリインスコエ?
		-6500	ハルピチャン4			
		6500-6100	マラヤガバニー II d層		新段階	
		6100-5500				
		5500- ca.5000	マラヤガバニー II b・c層	マリシェボ		ベリカチ
		-4700		(マリシェボ/ボズネセノフカ)?		
		4700-4300				
	後期	4300-4000	[カリチョーム3]	ボズネセノフカ	ゴリン式	
		4000-3700	マラヤガバニー II a層		オレリ式・ウディリ式	
		3700-3400	ゴールイムイス1-13~15層		マラヤガバニ式	
	新石器時代晩期 新石器/古金属器時代移行期	[3400-3000]	マラヤガバニー I c層	?	ボズネセノフカ/コッピ	
3000-2800		ゴールイムイス1-10~12層	ウリル?	コッピ		
古金属器	前期	[2800-] ca.2500	ゴールイムイス1-6~9層 マラヤガバニー I a・b層	ウリル	ウリル系	
		2300-2000	ゴールイムイス1-5層, 同5-住居			サルゴリ パリシャヤブフタ (ポリツェ)
	後期	[2000-]	ウリル系	ポリツェ		

¹⁴C年代は未校正。[]は先行研究による。
遺跡と層位は筆者らが実施した発掘調査で検出された生活面・遺構。

のボズネセノフカ文化と同系統の土器が伴う [Vasil'evskij, Golubev 1976]。この北部のアムール系統は、北部で大きく在地変化したとみられ、南部の中・後期土器変遷に直接介入した形跡は認められない。晩期には、南部のアニワ文化 [ワシレフスキー 1992 など] と北部のカシカレバグシ文化 [グリシェンコ 2015] がある。アニワ文化の土器は北海道続縄文の延長線上にあり、カシカレバグシ文化にも縄文が特徴的な土器がある。ほかに、中部・ヤスノエ 8 遺跡 (図 1-5) の無文平底土器群を標式とするツイミ式がある [Deryugin 2007]。年代は紀元前 9～7 世紀とされ、由来は大陸側の動きと関係するとされる [Deryugin 2010]。

新石器／縄文時代のサハリン・アムール下流域—北海道間の関係性については、従来推測されてきたより、その度合いが非常に薄いことが判明してきた。筆者は現在、以下 4 点の見通しを得ている [福田 2015c]。

- a. 日本列島北辺域において、縄文文化と大陸新石器文化群との構造的な接触は認められない。
- b. 北海道の外側にいる集団と北海道の縄文集団は、社会的な排他関係にあったわけではない。双方の定着的食料社会集団が拡大・定着しても利益のない環境が、中間の北サハリンの森林タイガ地帯に存在したからこそ、アムール下流域側と北海道側は結果的に二極分離した。
- c. アムール下流域と北海道の中間に位置するサハリンには、新石器時代を通じ、地域特有の新石器文化群がひろがる。サハリン集団は、大陸と北海道をつなぐ役割を基本的にはたさない。
- d. 両地域の動きを緩衝させる動きは、ca. 7500-7000 BP の完新世初頭の末期 (縄文早期後葉：石刃鏃文化期) と、紀元前 1 千年紀後半 (続縄文期前半) にあった。

2-3 千島／クリル・カムチャツカと北海道との関係性

千島／クリル諸島—北海道間の関係性については、日露間の政治的事情も関係し、ながらく不透明であった。この状況のなか、1994 年以降、B. Fitzhugh が代表を務める大規模な国際共同プロジェクト (IKIP : International Kuril Islands Project, KBP : Kuril Biodiversity Project) の一環として、千島／クリルの島々で遺跡調査が実施された [Fitzhugh et al. 2002, Fitzhugh 2007 など]。このプロジェクトで発見・調査されたほとんどの遺跡は、古金属器／続縄文～オホーツク期に属するが、新石器／縄文時代の行動様式や居住を推察できるような情報も得られている。そのほか、南千島における最近の報告 [Samarin, Shubina 2013 など] やロシア人調査者の話から、以下 4 点を指摘することができる。⁽⁴⁾

- a. ウルップ (得撫) 島以北の中千島・北千島⁽⁵⁾は、環境が過酷であり、新石器時代の人類活動はなかった可能性がある [Fitzhugh et al. 2002, 手塚 2010 など]。その先に位置するカムチャツカ方面からの異系統介入も確認されていない。
- b. 北海道に接する国後では、縄文遺物の存在が知られる。基本的には道東地域の系統にあるものが多い。知床周辺の道東地域と類似した状況下にあった可能性が高い。
- c. 択捉は、国後を通じて道東地域と連絡関係にあった可能性がある。ただし、人間集団が存在しにくい過酷な環境がその先にある「行き詰まり」の地での居住が、長期的であったのか短期的／回帰的であったのかは、まだ判断できない。
- d. 紀元前 1 千年紀後半 (続縄文期前半) に、縄文文化の適応限界を超え、北海道縄文系の拡大が中千島まで及んだ。

2-4 石材研究との比較

近年、日露米の国際共同研究チームが黒曜石産地同定研究を精力的に進めている [佐藤ほか 2002, Kuzmin, Glascock eds. 2010, Kuzmin et al. 2012 など]。発表された一連の成果からは、多量の北海道産黒曜石が時代を問わず、サハリンや南千島に広く安定供給されているように見える。しかし実際のところ、その供給量や供給範囲には時期差がある。

サハリンにおける北海道産黒曜石研究は、Golubev, Lavrov [1982] や木村 [1988 など] によって、1980年代から始められた。そもそもの議論は、旧石器後期～新石器前期のサハリン―北海道間に認められる石材交換メカニズムに限られていた。その流れを継承する Vasilevskij, Grishchenko [2014] は、サハリン・千島／クリル諸島・道東を俯瞰し、赤色ジャスパー⁽⁶⁾を産出する東サハリン山地をひとつの極とし、黒曜石を産出する白滝・置戸をもうひとつの極として捉えた (図2)。そして、他の地元石材の出現頻度との比較を行い、旧石器後期～新石器前期における石材の交換メカニズムと指向性について論じた。

前期に後続する中期以降が議論の対象から外されている理由は単純で、中期以降のサハリンにおいて黒曜石の量が大幅に減少するからである。無論、まったくなくなるというわけではない。その増減を定量的に示すデータはないが、新石器前期までとの差は歴然としている [福田 2014]。Vasilevskij, Grishchenko [2014] が指摘するように、その後、黒曜石の交換が再び活発化するの、新石器時代／古金属器時代移行期である。従来の産地同定研究は、こうした考古学的に認められる交流関係のあり方についてあまり考慮されていない。今後の新展開がまたれるところである。

一方、クリル諸島では、シムシユ (占守) 島 [シュービン 1990] で礫器、択捉島 [野村 1999] で立川ポイントとされる旧石器の出土が報告されている。が、ca. 7500-7000BP をさかのぼる確実な遺跡は、実際に発見されていない [Vasilevskij, Grishchenko 2014]。南千島では、縄文早期後半 (浦幌式) 以降の道東系の土器が出土している [Yanshina, Kuzmin 2010, Shubina, Yanshina 2014 など]。北海道産と目される黒曜石はそれらと相伴するようである。が、それより古い時代の様相がわからない。南千島では、国後島を中心に、北筒式や後期羽状縄文系に対比可能な土器があるとの報告がある [野村 1999, 右代ほか 2008 など]。ヤンキト2遺跡 (図 1-3 : [Shubina, Yanshina 2014]) などの調査成果から推察するに、択捉島では、黒曜石とともに地元石材も一定量消費されている。だが現状では、断片的な情報のみであるため、縄文系のひろがりを類型化することができない。北海道産黒曜石の供給範囲に関しては、縄文系遺物がよく目につく南千島までにとどまると想像するしかない。

続縄文期前半になると、その状況は一変する。Phillips, Speakman [2009] の産地分析によると、

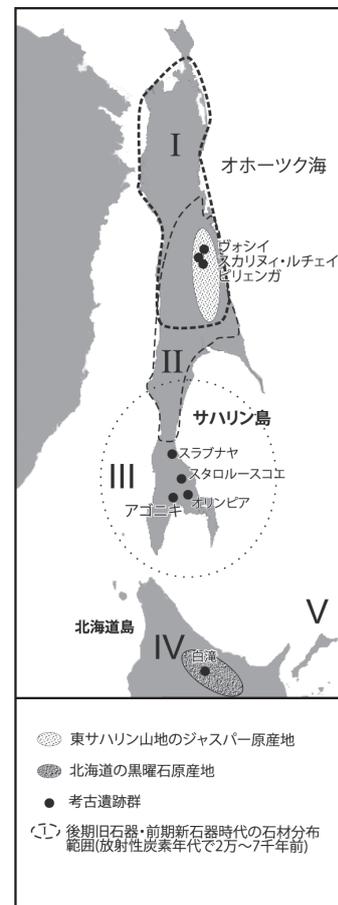


図2 サハリン―北海道―千島における石材分布 (Vasilevskij, Grishchenko 2014を和訳、一部再構成) I. サハリン北部、II. サハリン中部、III. サハリン南部、IV. 北海道、V. 千島／クリル

ウルップ島以南の島々で出土した黒曜石は白滝産・置戸産である。中千島北部のシアシュコタン(捨子古丹)島では、ドロブニエ遺跡(図1-1)出土の縄文を有する土器が道東の興津式に対比されている[大坂2010]。同島では、明治27年に千島を巡航した石川貞治が「縄文アル土器石鏃其他」を採集している[石川編1896:101]。中千島ではほかに、マツア(松輪)島アイヌ湾2遺跡(図1-2)にも、続縄文系統の可能性の高い土器がある[Fizhugh et al. 2002]。北千島のシュムシュ島・国端岬[林1953]でも、縄文のある土器が報告されている。カムチャツカ半島にもっとも近いシュムシュ島の例は詳細不明だが、続縄文土器を保持する集団の行動範囲は、少なくとも中千島北部にまで及ぶ[熊本2008など]。指摘される「縄文」のなかに、カムチャツカ方面や東シベリアの新石器～鉄器時代に典型的な縄文が紛れていないという保証はないが、日本側で何度も指摘されているように、その大半は続縄文系統とみなされる。いずれにせよ、縄文時代とはまったく異なる事情がある。⁽⁷⁾

③……………縄文文化の北方適応形態

3-1 道東北の縄文土器と食料資源

前章で、環境適応の面からも近年の遺跡情報の面からも、ロシア極東における新石器時代の文化動態のなかに縄文文化が拡大／進出する余地はないことを確認した。したがって、縄文文化の北限を知るには、北海道島の内部に注目する必要がある。ここではまず、早期後葉の縄文海進最盛期(並行関係については後述)から晩期までの動態を、生活環境に注目して通時的に捉える。

北海道の縄文土器には、道央南と道東北という二極性があることが、古くから知られている。学史を顧みると、道央南は東北北部方面、道東北は道央方面との関係性というように、各型式の交渉関係や空間的位置が説明されてきた。また、外縁に位置するサハリンや南千島で出土する縄文土器は、実際の有無や縄文土器か否かはさておき、北海道の接近する地域との関係性のなかで位置づけられてきた。土器型式に認められるこのような交渉関係史の動態からすると、縄文土器のあるところの限界がみえてくるようにも思われる。縄文土器があるところまでが縄文文化のひろがりである、という考え方は明快だが、それだけでは土器のあるなし論で終わってしまう。日本列島北辺域で出土する土器については、本州の縄文研究で一般的に通用するメカニズムのみで、その所在を説明できないものが多すぎる。

オホーツク海に面した道東北は、縄文諸型式の交渉・系統関係が総じて広域拡散的、単線的、断続的となる地帯である。集落遺跡の分布についても同じことがいえる。本州でも、地域特有の広域的・局所的災害や気候変動の影響によると考えられる型式の断絶や広域拡散は、しばしば認められる。だが道東北では、そのような現象がもっと明確なかたちで起こっている。土器型式や集落の活動期間が急に断絶することもあれば、地域全体である時期に遺跡数が激減することもある。これが、調査件数の少なさに由来した見せかけの分布であると考えるのは難しい。道東北では、地域環境に最適な生活構造が根づかなかった可能性が高い。この地域では、列島他地域と同種の定着的食料採集民が生活したが、滞在時間や人口密度などには構造的な差があったのではないか。

道東北の冷涼環境は、基本的に、日本列島に広域的に共通して認められる縄文的生活構造の維持

に適していない。が、良質で豊富な黒曜石資源が縄文集団にとって魅力的であったことは、想像に難くない。食料資源を安定確保できた時期・地域にかぎり、維持可能な集落が長期的に形成された可能性はある。

オホーツク海に接する道東北には、東北や道南とはかなり違う食料事情がある。この地域の縄文集団は、オホーツク海に由来する豊富な海産食料資源を獲得する生業戦略を選択する。オホーツク海は、北太平洋のなかでも極めて生産性が高いことで知られている。つまり、オホーツク海岸は縄文文化の戦略的進出／定着の北方最前線となった。

縄文土器型式の二極性に象徴される道央南一道東北という文化動態の差は、黒松内低地帯以南の落葉広葉樹（ブナ）林帯、それ以北のブナを欠く（汎）針広混交林帯という植生帯の違いと、ほぼ対応する。北海道における平地の森林植生のほぼすべてが、従来の日本国内基準では冷温帯、世界基準では温帯に属する〔田端 2000〕。ブナ林の分布範囲は越えるが、道東北も「温帯性」である。つまり、縄文的な特徴が安定的に認められる本州と連なる温帯性の森林資源が、北海道における居住環境の基本となる平地部に存在する。縄文集団が道東北に拡大定着する背景には、このような陸域食料基盤がある。

ケッペンの気候区分では、北海道はまるごと亜寒帯の気候環境に属してしまう。本州と比較して寒冷で乾燥するという全体的傾向は軽視できないが、この有名な区分を縄文時代に先験的に適用してしまうと、本州の大半が入る温帯とはまるで異なる気候環境に適応したのが北海道縄文文化であるという誤解が生まれる。藤本〔1979：68-69〕は、たとえ独自の内容があっても、道東北の基本は「漁撈・植物採集・狩猟のバランスの上に築かれた東日本的縄文文化」に属すると述べた。この評価に、筆者はおおむね賛同する。

3-2 道東の生活環境

縄文文化の北方適応形態の内実をよく見通せるのが、道東地方である。道東は、東北縄文集落遺跡群を取り巻く箱庭的景観にくらべて、相対的に緩慢で単調な景観にある。にもかかわらず、広い面積のなかに列島特有の山岳地形が連なり、多様な生活環境が存在する。

北海道全体は、日本海・オホーツク海・太平洋という3つの海に面し、対馬暖流・親潮・東サハリン寒流の影響を受ける。また、脊梁山脈をはじめとする大小の山脈群が、夏冬の季節風を受けとめるため、四季を通じた気候は地域によって異なる。北海道の気候は、海流・地形・季節風・海流の影響を考慮して、①渡島半島～噴火湾沿岸の道南地域、②日本海沿岸地域、③太平洋沿岸西部地域、④太平洋沿岸東部地域、⑤オホーツク海沿岸地域、⑥内陸部、の6つに区分することが通例である。道東の気候は④と⑤に分けられ、その差は北海道史全体を通じた地域差とも対応する。

④太平洋沿岸東部は、親潮によって冷やされた夏季の湿った季節風の影響を受けるのが特徴となるが、そのなかにも多様性がある。海岸からやや内陸に入った十勝平野の冬は⑥の傾向が強く、晴天と厳寒がつづく。一方、道最東端の根室半島近辺は、海霧の影響を受けるため、日照時間は600h未満と低い。温量指数WI〔吉良 1949〕は45を下回り、日本の平地部ではもっとも低い。堀田〔1974〕の基準では、WI45以下は亜寒帯性針葉樹林（タイガ）となり、根室半島は色丹・択捉島とともに亜寒帯針葉樹林帯に属する。植物分類学者の高橋〔2002〕は、この区分が実際に見られる植生と整

合すると指摘した。根室半島とそのさきに連なる歯舞・色丹島の環境は基本的に、道東全体よりも縄文文化に適さない。

一方、知床半島（山地）の北側にひろがる⑤オホーツク海沿岸は、夏冬ともに乾燥した季節風が吹き込むため、年間を通じて降水量が少ない。接岸した流氷が海面を覆い、冬は大陸的な厳寒が続く。湿度の低さは、本州と比較した場合の北海道全体の特徴でもあるが、オホーツク海沿岸でとくに際立っている。道内各地に比べても、日常的に乾燥した空気にもっとも気を遣う地域である。本地域の年間気候を表現する気候区分法として都合のよいものはあるが、考古現象との対応関係をうまく説明できるものはみつからない。もっとも、筆者の生活体験に照らして、列島（日本）的ではなく大陸（ロシア）的な気候であると説明するのが適しているように思われる。

その視点にたつと、縄文的生活構造が大陸的な寒冷・乾燥地での越冬居住・活動に適したのか、という疑問が生じる。新美 [1990] は、北筒式期の北見市トコロ貝塚（図3-4）出土動物骨の主体を占める魚類と海獣の捕獲期に注目し、この貝塚は通年利用されたと考えた。冬季の過酷な環境下のオホーツク海で海獣狩猟がさかに行われたという局面もあるが [新美2013]、それがオホーツク海沿岸における縄文時代を通じた特徴であるとはかぎらない。こうした気候条件において、活動規模の縮小や、大規模な季節移住、撤退が頻繁に起こっていた可能性についても考慮したい。

永谷ほか [2014] の集成によると、前・中期の本地域では、浜頓別町日の出遺跡（図3-1）、網走市大曲洞窟遺跡（同図5）、同市天都山遺跡（同図6）、北見市トコロ貝塚、小清水町神浦6遺跡（同

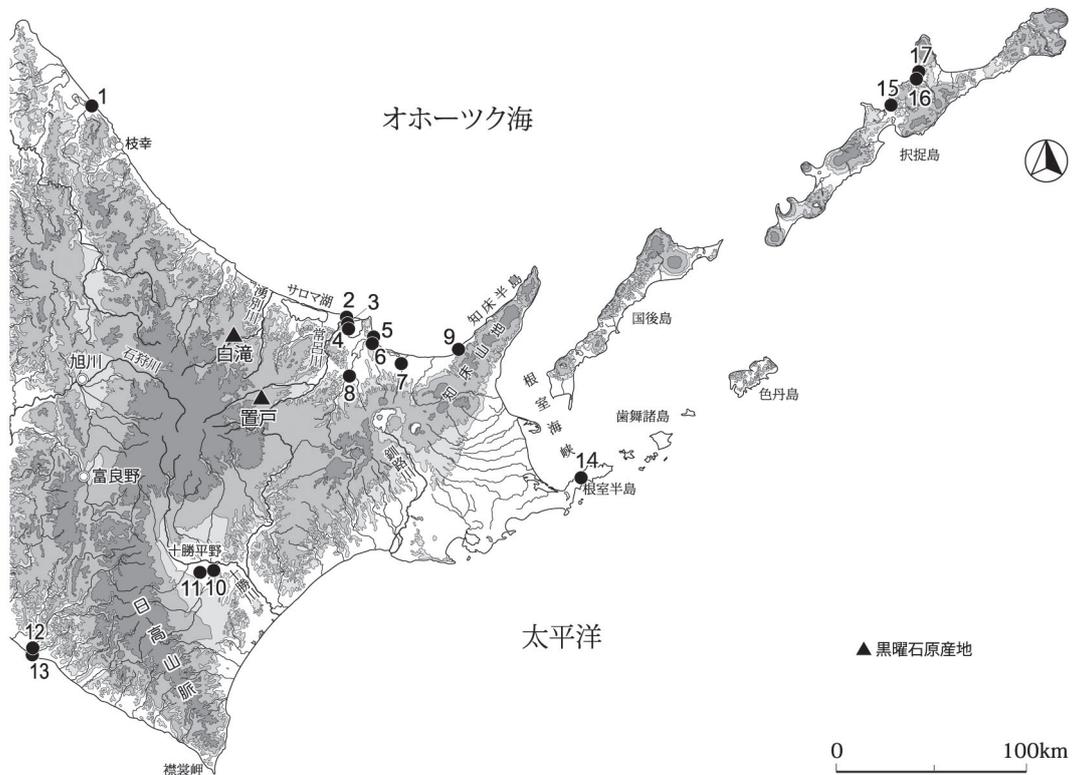


図3 道東・南千島における言及遺跡の位置（石刃鎌文化期の遺跡は図9参照）

1:日の出, 2:常呂川河口, 3:トコロチャシ南尾根, 4:トコロ貝塚, 5:大曲洞窟, 6:天都山, 7:神浦6, 8:ピラオツマッコウマナイチャン, 9:オライネコタン3, 10:大正3, 11:八千代A, 12:ピタルバ, 13:ケノマイ2, 14:初田牛20, 15:クイブウシェフカ川, 16:キトボエ1, 17:ヤンキト2

図7)に貝塚がある⁽⁹⁾。縄文海進最盛期に形成された海岸線と関係して貝塚が形成され、それと関連する生業施設が出現し、集落構造や生業形態に独自性が強まる。筆者は、東北北部(古八戸湾)における景観・生活環境の変化に関する近年の研究動向との比較を行い、道東の縄文海進最盛期は、東北北部早期後葉・赤御堂式並行期の東釧路Ⅱ式期になると判断した[福田2015c]。この段階で、道東特有の環境に適応可能な縄文的生活構造が安定化し、その後、東釧路式系が広域拡散しつつ展開する基盤ができたと考えている。その後の文化動態は、基本的に温暖環境を前提とする。欧米やロシアでよく言われる気候最適期(climatic optimum)―完新世中期は、ここからはじまる。

筆者が大陸のというオホーツク海沿岸の生活環境は、不規則な寒暖の差の影響を受けやすい性質にある。縄文後期前葉に、それをよく示す考古現象が認められる。本地域では、縄文後期前葉になると遺跡が壊滅的に減少する。藤本[1979]は、流水の到来による極度の寒冷化が本地域における人口減少をもたらした可能性があるとして指摘した。遺跡数の激減は、全道的な遺跡の減少傾向に同調するものだが、本地域での変化は極端すぎる。そのため、道東での調査経験者たちは、藤本の推論に理解を示してきた[宇田川1988, 武田2006, 豊原2008b]。傍証するデータは持ち合わせていないが、筆者もまた同じように考えている[福田2008]。この変化は、中期/後期移行期の北筒式土器群の分布範囲によく表れている。道東における北筒式系の終末期に丸松式土器がある[豊原1996]。丸松式の前段階には細岡式が位置づけられる(図4左参照:[森2006])。丸松式より古い段階にあるトコロ6類は道東全域に分布するが、丸松式は釧路・根室・十勝地方と富良野方面に分布し、オホーツク海沿岸にはまったくない(図4右参照:[豊原2008b])。これは、丸松式の時期に、知床半島(山地)⁽¹⁰⁾を越える大規模なリスク回避行動があった可能性を示唆する。

なお、本州では、前期末～中期初頭の気候冷涼期に気植物質食料の枯渇や海面低下が起こり、人の動きが活発化したと指摘される[今村2010など]。これと同調した気候変動がオホーツク海沿岸にも認められるのかどうかを判断する材料は得られていないが、そこに、道東特有の激しいマイクロ変動をみてとれる可能性はある。

北見市常呂遺跡群における遺跡分布の通時的变化をみると、後期前葉の遺跡激減期につづく中葉

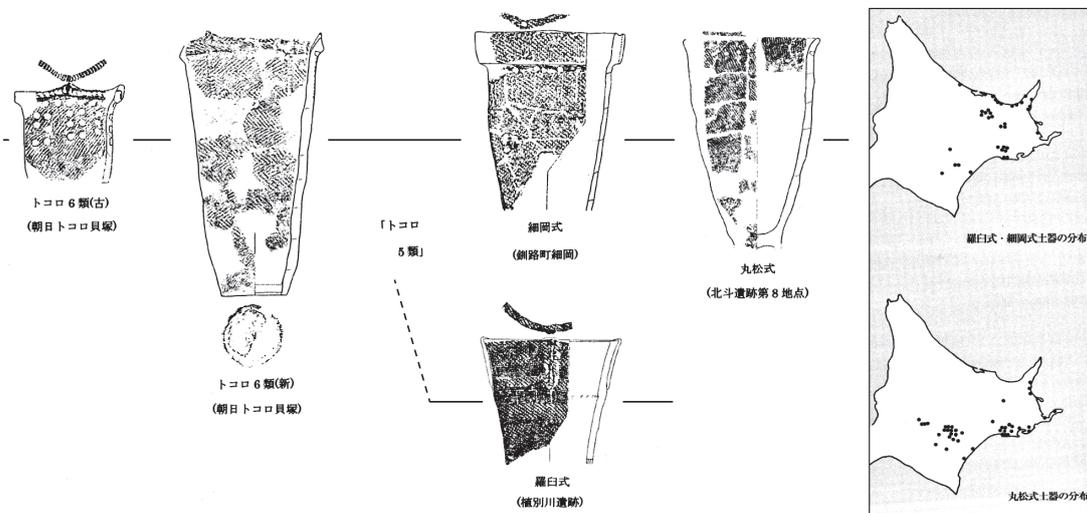


図4 北筒式土器の変遷と遺跡分布の変化(森2006, 豊原2008をもとに作成)

になり、磨消縄文系土器の普及とともに、新しい生活構造が出現する。トコロチャシ南尾根遺跡(図3-3:[藤本編1976])では、沢に接した南斜面に竪穴がかたまる傾向に注目された。この時期の竪穴は、4号、11号がある(図5)。集落は2~3軒単位の住居が通例とされる[常呂町郷土同好会1991]。2軒とも壁柱穴が全周する径5~6mの円形住居である。中央に炉を伴うが、床施設は全体的に貧弱である。埋土下部から掘り方に堆積する黒褐色土層との関係はよくわからないが、壁が相対的に低いように見える。一方、トコロ6類期前後の2号竪穴は、非常に堅く踏み固められた床面に、柱穴の可能性のあるピット6基、柱穴ではなく床構造と関係するとみられるピット1基が不規則に並んで検出された。床の水平を保つため、壁は自然斜面にあわせて高さを変えているが、4号、11号との間で、内部や上屋の構造には差があるようにも思える。4号、11号は、まぎれもなく竪穴住居であるが、その構造は、温暖環境を背景とした長期的あるいは複雑な社会組織の存在を想定さ

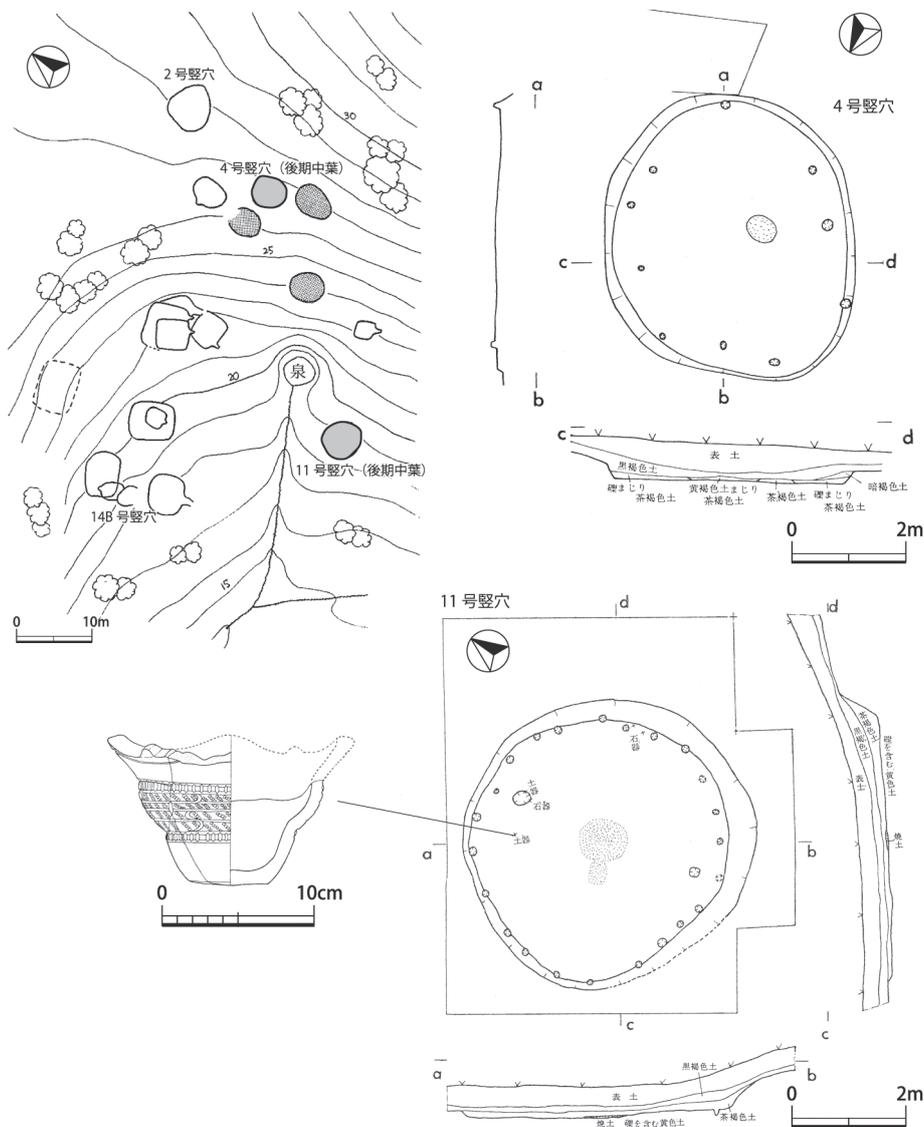


図5 トコロチャシ南尾根遺跡の集落構造
(藤本編1976, 常呂町郷土研究同好会編1991 をもとに作成)

せるような住居とは大きく異なるのではないか。武田 [2006] は、本遺跡の 4 号, 11 号竪穴と、約 300m 離れた常呂川河口遺跡 (図 3-2) 第 4 層の集石・焼土 (海獣骨を伴う) 遺構群との関係性について、台地に居住した小規模集団が近接する低地で生業活動を行ったと考えた。類例が少なく、明言できない状況にあるが、外地から進入した小規模集団が常呂川河口部の居住適地を占有し、孤立的に海洋資源を利用した可能性についても、今後考えていきたい。

後期後葉以降も、遺跡数が少なく、在地的な土器型式の展開は低調となるので、さほど変化のない状況が続いたとみられる。後期末葉～晩期初頭 (道央の御殿山式期, 道東の栗沢式期) になると、周堤墓や三叉文系土器が出現し、道央方面との関係強化が図られた。ただし、道央方面と連絡する関係は一過性のものであり、その後継続しない⁽¹¹⁾。

こうした道東縄文の常態が大きく変わるのには、道央周辺の浜中大曲式土器の影響を受けて道東に特有の幣舞式土器が成立した晩期中葉である [福田 2007]。このころから、オホーツク海岸でも集落数が増え、土器をはじめとした遺物の数も増加する。墓制の面では多数の副葬品が供えられる多副葬墓が顕在化し、生業面では石器組成に変化が生じる。晩期中葉に顕在化する傾向は続縄文期に一層強まる。続縄文期は、適応強化を果たし、縄文的生活構造から脱却した社会が存在した [福田 2013・2015c]。その萌芽は、縄文晩期後半に認められる。

以上に記した全体像は、縄文海進最盛期以降のことである。それでは、それに先だつ縄文早期 (完新世初頭) の道東にはいかなる適応形態があったのか。次章では、この点を論じる。

④……………完新世初頭の北方適応形態

4-1 縄文海進最盛期までの適応過程

「テンネル・暁式土器群」[西 1997] が成立する早期前半以降、道東では、集団の行動様式や生活構造が環境変動に敏感に反応しながら変化しつづける。とくにオホーツク海沿岸の生活環境は、寒暖の差の影響を敏感に受けた可能性が高い。それがよくわかるのは、早期前半 (テンネル・暁式期) の文化動態と、早期後葉の「道東の石刃鎌文化」[福田 2015e] の消長である。

早期のことに触れる前に、まず、草創期の帯広市大正 3 遺跡 (図 3-10 : [北沢・山原編 2006]) を位置づけておく。安斎 [2014] は、先行研究を整理し、ハインリッヒ 1 寒冷化イベント後の緩やかな温暖化を経て、急激に温暖化したベーリング／アレレード期に本州集団が北上した、と説明した。爪形文土器やそれに共伴する石器群は本州系であるという見解は一致している。サハリンやアムール下流域に類例を求める理由はすでにない。道内に対比可能な資料がなくヨコの関係の辿りにくいのだが、土器文様に独自性が強く、在地変化を一定期間経過していると思われる。

大正 3 遺跡の草創期の生活面は、I 群土器片の 81.5% が出土した VIb～VIII 層と考える。最下層の VIII 層は段丘面を形成する砂礫層である。発掘調査を担当した山原 [2006] は、この生活面が上面の微地形から離水時あるいはその直後の状況にあり、上面の礫や砂粒の大きさの場所による違いが離水直前の流路や水量を反映する可能性を示唆した。水辺に接する低地が占有されたようだ。土器付着物の同位体分析、脂肪酸分析からは、水産資源を煮炊きしたと指摘されている [Kunikita et al. 2013,

Craig et al. 2013]。固定的な居住ではないにせよ、漁撈活動が存在する本州の草創期の生活像から大きく逸れない、水辺における継続的／回帰的な活動があったとはいえる。

山原 [2008] は、時空間的な膨らみをもつ完新世的な活動を本遺跡にイメージしている。たしかに、本州草創期的な生活構造に適した環境が、道内で帯広周辺のみ孤立して存在したとは考えにくい。晩氷期の急激な温暖化に伴い道東太平洋沿岸に進出した集団は、北海道全体における「後期細石刃石器群」[山田 2006] を伴う行動様式と並存し、全体的に温暖化に関連した行動の固定化／拠点化があったと指摘されている [同前]。共通した温暖気候への対応は、大正3遺跡にも認められる。ただし、その拡散の仕方や、並存する後期旧石器の行動様式との関係を議論するときは、行動様式の異なる集団が共通した環境下にモザイク状に存在した可能性を、まず想定する必要がある。

帯広より緯度がやや高いアムール流域に分布するオシポフカ文化は、北緯50°前後（アムール河とゴリン川の合流点付近）より高緯度地帯にひろがりにくい性質にある [大貫 2010 など]。そのことからすると、縄文草創期の場合も、適応可能な北側の範囲には限界があると考えるのが適切であろう。列島特有の草創期的な生活構造が展開可能な環境は、道東オホーツク海沿岸以北には存在しなかったと推測する。

4-2 テンネル・曉式期の適応形態

大正3遺跡以降、しばらくの間、道東では人間活動の痕跡が発見されていない。早期前半（テンネル・曉式期）になると、道東太平洋沿岸を中心に、堅穴や土坑を伴う定着性の高い集落遺跡が分布するようになる。國木田 [2014 など] による炭素年代で、9050-7420BPの現象である。温暖化の影響で、広葉樹（コナラ・クルミなど）の利用が活発化する。

複数の遺跡で、小型円形堅穴（2～4m）が数多く検出されている。帯広市八千代A遺跡（図3-11：[北沢編 1990]）の事例は、掘り込みが相対的に深い反面、柱穴などの付属施設が貧弱である（図6参照）。山原 [2005] は、周年定住を意図した家屋ではなく、道東で以前から活動していた集団が、本州北部と同様の文化領域に含まれる道南方面からの影響を受けつつ、完新世環境へ適応しようとした結果うみだされたものであると評価した。襟裳岬の西部、日高町ピタルパ・ケノマイ2遺跡（図3-12・13：[川内谷編 2002・2015]）でも、数十軒の堅穴からなる集落が検出されている⁽¹²⁾。その構造は、道東とあまり変わらない。テンネル・曉式土器群を伴う生活構造は、道東太平洋沿岸を中心とした太平洋に面する地域に分布する。

オホーツク側でも、美幌町ピラオツマッコウマナイチャシ遺跡（同図8：[小林 1985]）と斜里町オライネコタン3遺跡（同図9：[豊原ほか 2010]）でテンネル・曉式土器が出土した。オライネコタン3遺跡では、集落の存在を示唆する遺構が確認された。枝幸町でもその可能性のある土器はあるが、評価は難しい [山原 2014]。

宗谷海峡を越えたサハリンでも出土例がある。サハリン南東部スラブナヤ4遺跡からホタテ貝背圧痕をもつ底部片が出土した（図7-13・14）。Grishchenko [2011] は、道東のテンネル・曉式と関連づけている。國木田 [2014] の年代測定によると、スラブナヤ4遺跡（図1-6）の土器付着物の炭素年代は、テンネル・曉式土器と多くの範囲で並行する。ただし大貫 [2014] は、テンネル・曉式につづく平底条痕文土器群に近い可能性があるとして述べた。

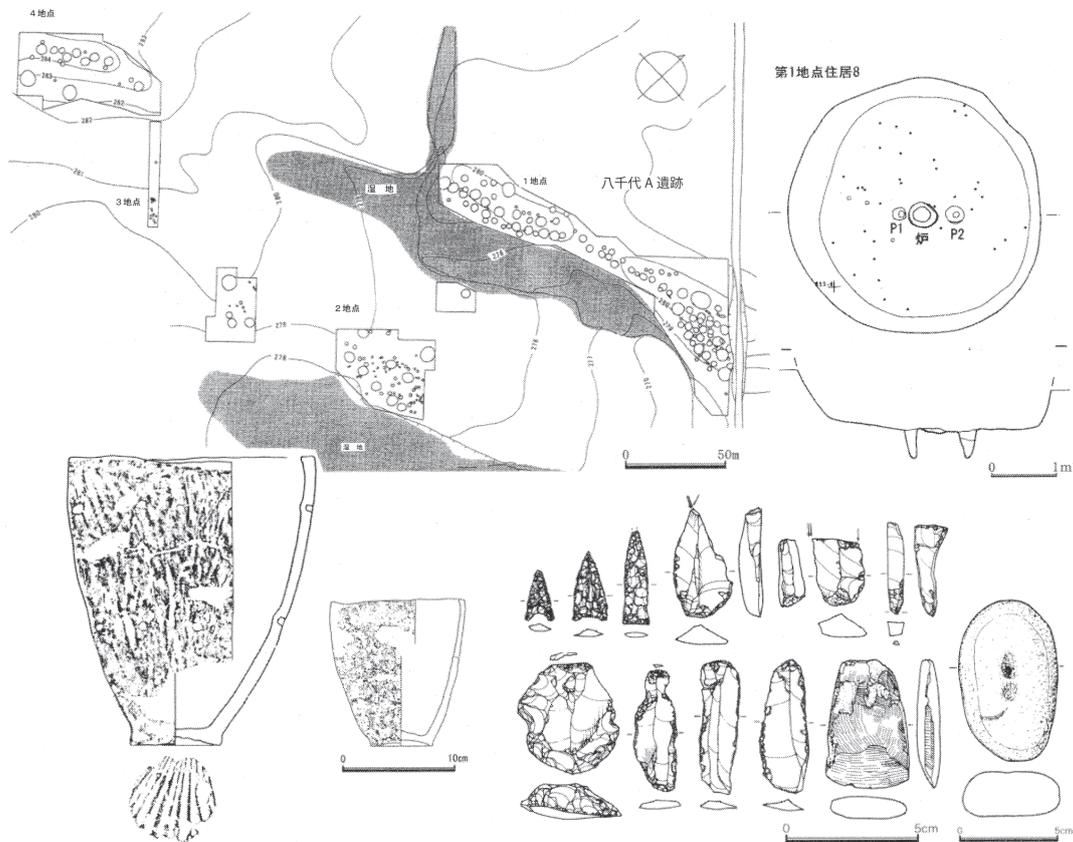


図6 八千代A 遺跡の遺構と出土遺物(北沢編1990, 山原2008 原図)

この議論に関しては、テンネル・暁式のホタテ貝背圧痕が、文様というよりは土器胴部に底部を押し付けるときに使う台座の痕であることに、まず注目すべきである [福田 2015c]。テンネル・暁式土器群には、円盤の球面を使って底部を胴部に押し付けたとみられる無文の底面もよくある。底面圧痕自体は、サハリンも含めたオホーツク海沿岸地域全体に一定期間ひろがった、底部を押し付けて凹ませることを要する土器製作技術の存在を示す可能性がある。

底面ホタテ貝背圧痕をもつ類例はほかに、サハリン南西部ゴルノザボーツク 2 遺跡 (図 1-7) にある。採集遺物全体を観察したが、土器の大半を占めるのは、宗仁式 (図 8-8 参照) もしくはその直前に並行する「プロト宗仁式」⁽¹⁵⁾ と呼称される無文土器群 (同図 9 参照) であった。懸案の底部片は、圧痕以外の特徴はそれらに類似する。國木田大がこの底部片の内面付着物 2 点の炭素年代測定を試みたところ、 6600 ± 220 BP (MTC-17164), 7760 ± 750 BP (MTC-17272) となった [福田ほか 2015b]。採取試料が極少量のため、振幅と誤差は大きい。前者の数値は、 $\delta^{13}\text{C}$ が -24.3% であることからリザーバー効果を大きく見積もって古いと考えても、筆者の観察結果と整合的である。だが後者は、國木田 [2014] の想定によるテンネル・暁式の年代範囲 (ca.9000-7400 BP) の新しい部類に入ってしまう。現状では、判断を保留せざるをえない。

テンネル・暁式類似の資料は、今後ほかにも発見されることが予想される。だが、横山 [1998] の指摘通り、少なくとも道東太平洋沿岸におけるテンネル・暁式期の動態に関しては、土器製作技術以外の要素の成立過程を本州 (系) 以外の所に求められない。そのため、太平洋沿岸に特徴的な生活構造

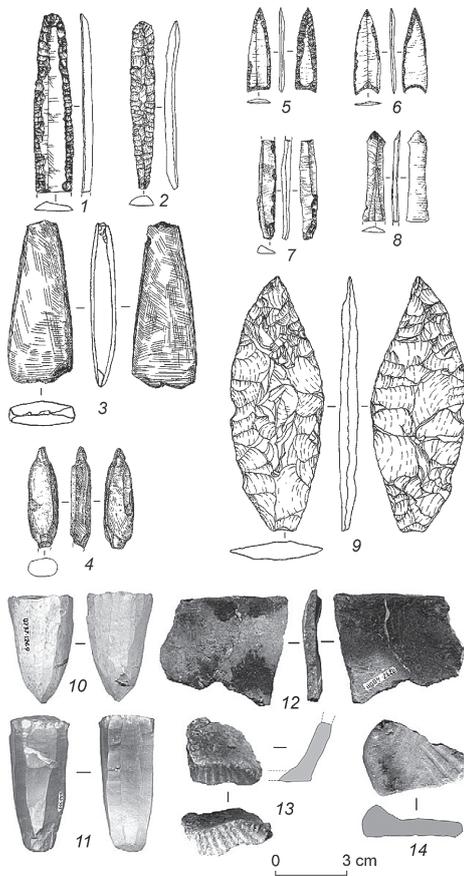


図7 サハラ新石器時代前期の遺物
(Vasilevskij et al. 2010)

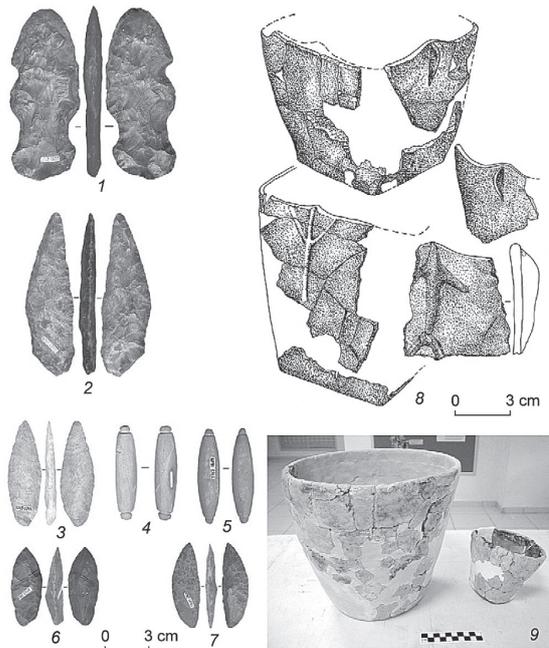


図8 サハラ新石器時代中期(宗仁文化)の遺物
(Vasilevskij et al. 2010)

は、オホーツク海沿岸の気候環境には基本的に適さず、そのうちの南部に散在する程度であったと推測する。

4-3 道東の石刃鎌文化

「道東の石刃鎌文化」[福田 2015e] の出現は、東北北部のムシリ I 式 (= 早稲田第 3 類土器) 期前後に生じた、道東を中心とした北海道の特異現象である (遺跡分布は図 9 参照)。相原 [2015] の編年によると、主体となる浦幌式期は東北の早期後葉にほぼ並行する。後述するように、浦幌式に先行する段階があり、東北方面の縄文土器とは無関係と考えられる女満別式土器が伴う。国内でのヨコの関係を辿りにくいのが、炭素年代は ca.8000BP を全体的に下るので、東北の早期中葉 (吹切沢式) 並行には及ばないとみる。

北海道に石刃鎌石器群が出現する現象は、道東を中心とした行動・居住論と、大陸起源・集団伝播論の双方から注目されてきた。前者に関しては、道内における製作過程、兵站的あるいは回帰的な行動様式、黒曜石の入手から運搬・消費に至る一連の過程が、具体的に復元されてきた [高倉 1997・1998, 山田 2013, 山田・中村 2015 など]。その一方、後者の大陸側との関係性に関しては、この文化の担い手ないしは文化要素がサハラから、あるいはサハラを経て大陸方面から招来されたと考えられてきたのだが [加藤 1963, 木村 1999, 高倉 2001 など]、既存資料から説明できない局面が非常に多かった。その現状打開を目的とし、筆者らは 2011 年以降、アムール下流域—サハラ—道東で完新世初頭遺跡群の発掘調査を実施してきた⁽¹⁶⁾。

結果としてわかったのは、大陸側との関係について、石刃鎌文化期の道東と大陸との間に「ゆるやかな」関係性は認められるが、大

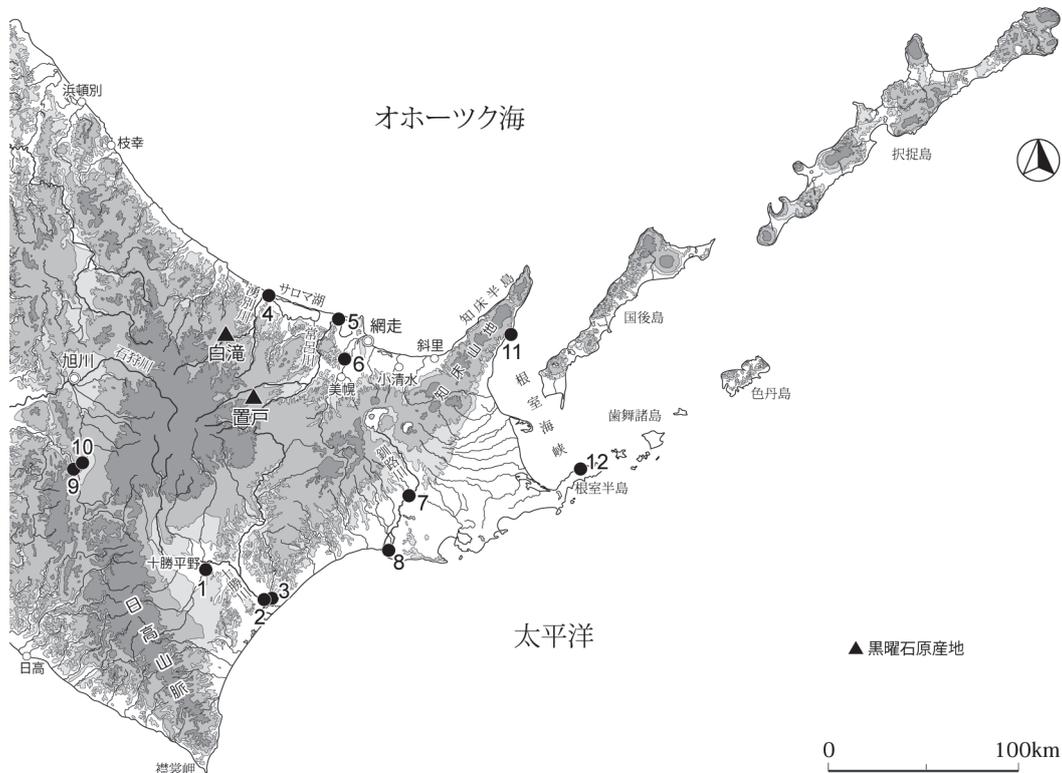


図9 石刃鎌文化主要遺跡の位置

1:大正3・7, 2:新吉野台, 3:共栄B, 4:湧別市川, 5:トコロ貝塚, 6:女満別豊里,
7:二ツ山, 8:東釧路, 9:東山, 10:西達布2, 11:オタフク岩, 12:トーサムボロ

規模な集団移動の痕跡は存在しないということである。中間に位置するサハリンが、直接的な連絡関係を緩衝した可能性が高い [福田 2015c]。森先 [2014] が指摘するように、大型石刃製の類似した形態をもつ鎌の分布は、文化系統というよりは地域環境適応の相似性に由来すると考える。

道東の早期には、テンネル・暁式→条痕文系土器群→石刃鎌石器群を伴う土器群という大きな変遷がある。後藤・山原 [2008] が細別を示した「北海道東部条痕文系平底土器」のうち第1群～第2群が条痕文系土器群、第3群が石刃鎌石器群を伴う土器群に相当する。

条痕文系土器群とは、東釧路Ⅰ式・大楽毛式・下頃辺式・沼尻式などと呼ばれてきたものを総称したものである。國木田 [2014] による炭素年代は、7995-7340 BP のなかに収まる。大沼 [1999] が、早期の北海道における「非本州系土器群」のなかで、坪井正五郎の時代にまで遡る長い学史を整理した。これにもとづき既存資料を見直すと、十勝地方・釧路地方・オホーツク地方という、少なくとも3つの内的地域性と、道央方面または道北方面との関係という接触構造のなかで、めまぐるしい変化が起こったとみられる。後述するようにサハリンとの関係が窺われる特徴を有する土器もあるのだが、時空間的な細別は今なお整理されていない。

一方、石刃鎌石器群を伴う土器群とは、浦幌式、女満別式、トコロ14類などと呼ばれてきた一群である。絡条体圧痕文が特徴的な浦幌式は十勝またはその周辺を中心に分布するが、帯広市大正遺跡群の調査により、十勝地方では、やや肉厚の無文／条痕文土器（沼尻式系）などと異系統共存することがわかってきた。大正7遺跡 [北沢・山原編 2006] では、浦幌式（図 10-2～5）と沼尻式系

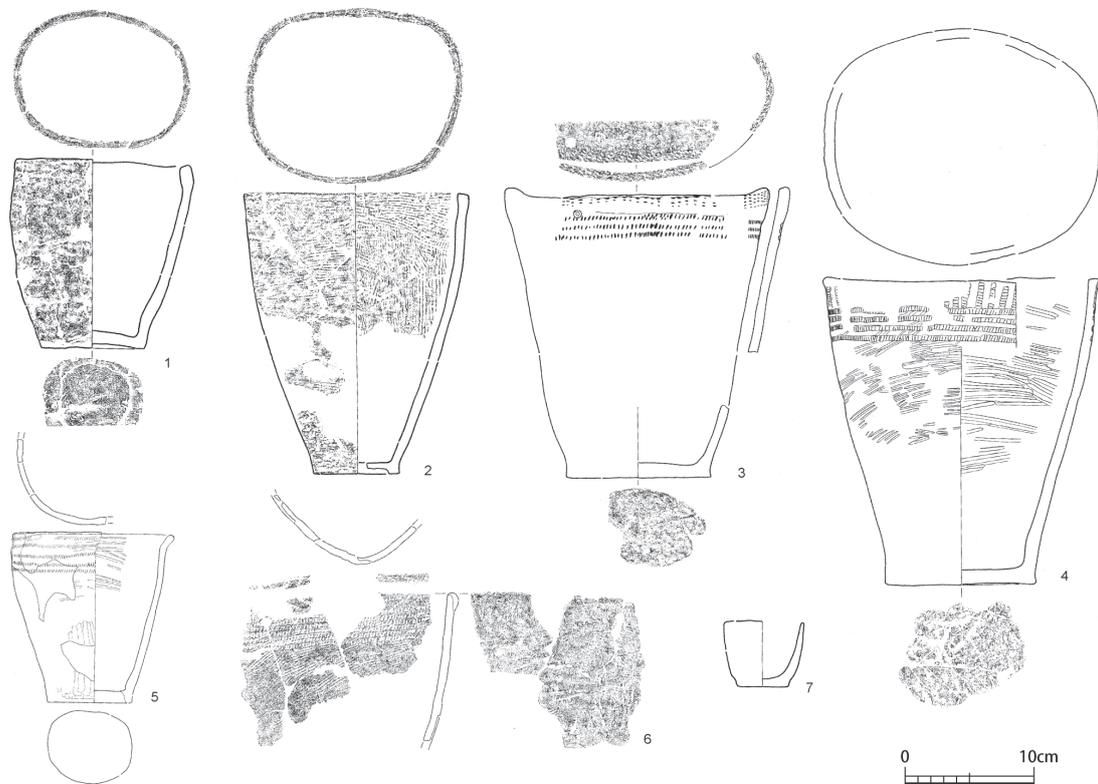


図10 大正IV群土器 (北沢・山原編2006)
[出土遺跡] 1～5・7:大正7, 6:大正3

(同図1・7) は出土状況から一括資料であると判断され、それらを包括した「大正IV群」[北沢・山原編2005]は一時期に収まることが確認された。

筆者らは、オホーツク地方に位置する湧別町湧別市川遺跡で2013年に発掘調査を実施した。本遺跡は、石刃鎌文化の拠点的遺跡としてよく知られている。この調査によって、石刃鎌を伴う現象に関する従来の認識を大きく変える結果が多数得られている。その詳細は、発掘調査報告と関連する分析・考察結果をまとめた報告書[福田編2015]と、筆者がその後に考察を加えた別稿[福田2017]に譲る。ここでは、本稿の論旨に関する結果を要約・抜粋した上で、議論を進める。

湧別市川遺跡は、明治期以降の土地改良や耕作の影響により、遺跡包蔵地の大半が消滅、あるいは底土となるローム層(基本層序IV層)まで攪拌されていた。しかし、2013年調査で設定したTP2(図11・12参照)では、上部からの攪拌作用の影響が少ない、遺構群と土器・石器・木炭等を伴う単純包含層(基本層序III層)を検出することに成功した。遺構は、竪穴住居2基(遺構4b, 遺構4c)、小ピット2基(遺構1a, 遺構1b)、墓坑1基(遺構4a)がある。共伴する石器は「石刃鎌石器群」[木村1976, 高倉1997など]であり、99%以上が黒曜石製である。石刃石器(石刃鎌・彫器・削器・彫削器・搔器・錐状石器)、両面調整石器、石斧、砥石、石鋸がある(図13)。彫器が多いという特徴がある。

土器に関しては、石刃鎌石器群に共伴する湧別市川I群(図14-1~13)を設定し、浦幌式系(同図1~8)と沼尻式系(同図9・10)の異系統共存を確認した。略楕円形の上面観と表裏条痕文を有することで、両者は共通する。型式組成が十勝地方の大正IV群に近いので、湧別市川I群と大正IV

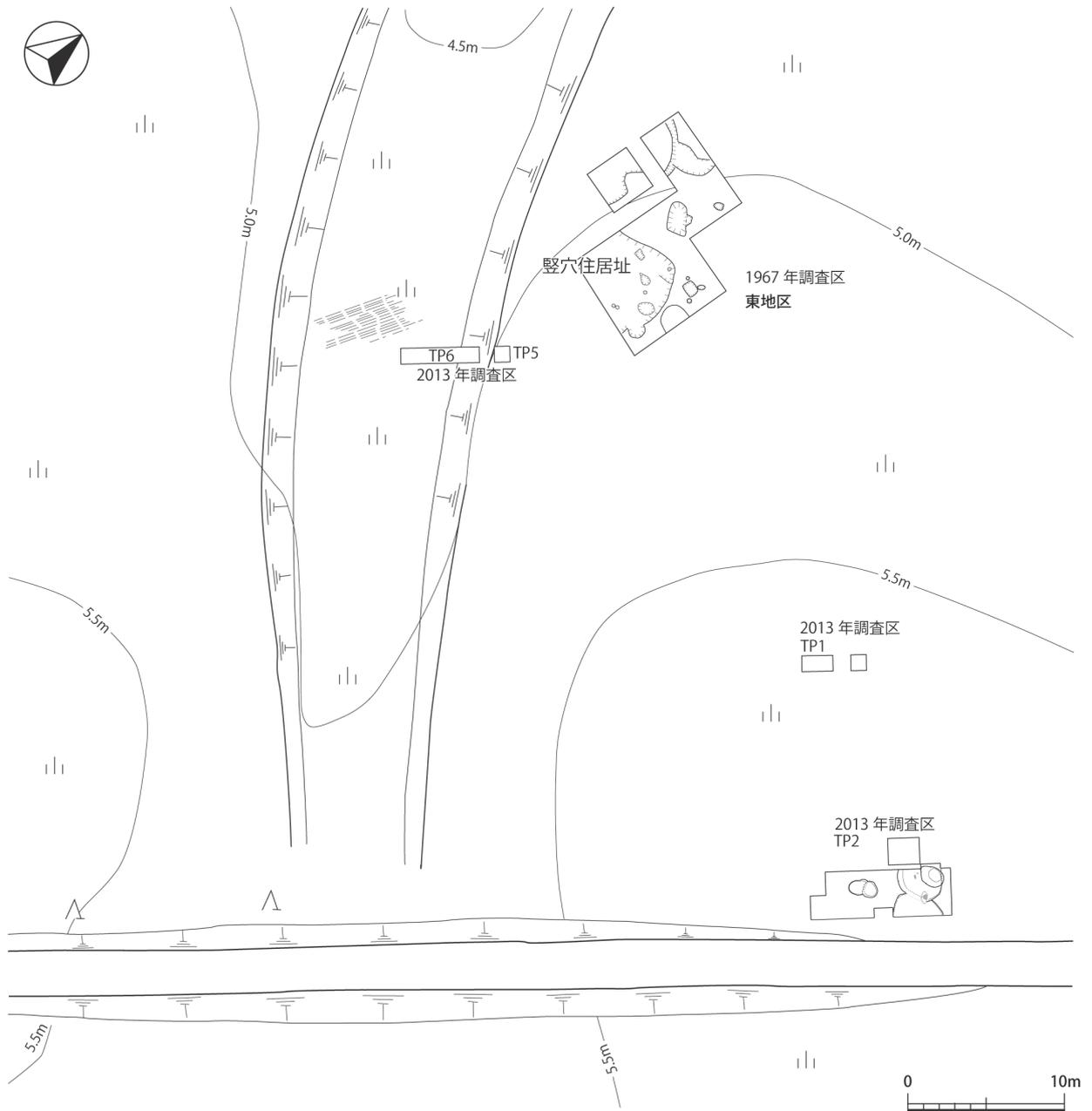


図 11 湧別市川遺跡の遺構分布状況 (福田編2015 をもとに作成)
地図記号は北海道大学所蔵原図をもとに推定

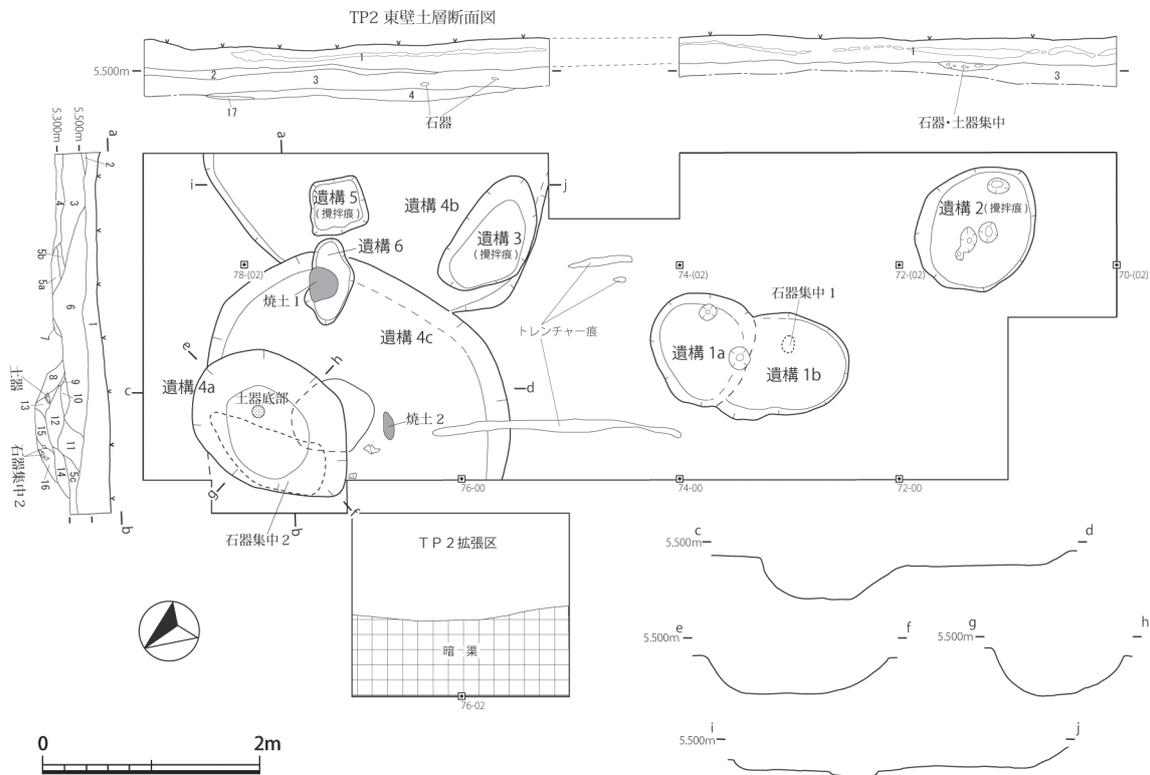


図12 2013年度湧別市川遺跡発掘調査TP2における遺構平面図および土層断面図 (福田編2015)

群は並行関係にあると考えた [福田 2015a]。國木田 [2015] の年代測定結果も、湧別市川 I 群と大正 IV 群の並行関係を支持する。以上の結果をふまえ、遺跡が位置するオホーツク地方南部 (網走地域) には、沼尻式⁽¹⁷⁾→嘉多山式→湧別市川 I 群という順があると考えた。湧別市川 I 群には、直前の嘉多山式系はこのならず、十勝地方の浦幌式系と、おそらく知床周辺に由来する沼尻式系とが共存する。

4-4 女満別式土器再考—サハリンとの関係性—

網走地域ではほかに、石刃鎌石器群を伴うトコロ 14 類 (図 14-14~22) と女満別式 (図 15-17~19) がある。トコロ 14 類は、北見市トコロ貝塚 [駒井編 1963] 最下層で検出された住居址に伴う一群である。それらは、浦幌式系統の絡条体圧痕文と、略楕円形の上面観を有することから、湧別市川 I 群と相補の関係にある [福田 2015a]。一方、女満別式は、トコロ貝塚から直線距離で 25km 強離れた大空町女満別豊里遺跡 (図 9-6: [大場・奥野 1960]) を標式遺跡とし、沿海地方ルドナヤ式やアムール下流域コンドン式に特徴的な型押文との関係性が窺われてきた。筆者は、石刃鎌石器群を伴う土器群全体のなかで、上面観が円形であり、付着物の炭素年代が石刃鎌文化のなかでは古手に偏ること [國木田ほか 2007] に注目した。そして、佐藤 [1964] や大貫 [2014] にしたがって、湧別市川 I 群—トコロ 14 類とは別型式であると考えた [福田 2015a]。

道東とアムール下流域との中間になるサハリン中部アドティモボ 2 遺跡 (図 1-4) で、女満別式類似の土器 (アドティモボ 2 群: 図 15-12~16) がまとまって出土した [ヤンシナほか 2012, 福田ほか 2015a]。大陸と道東の中間地帯での類例発見は、佐藤 [1964] の指摘以来注目されてきた女満別

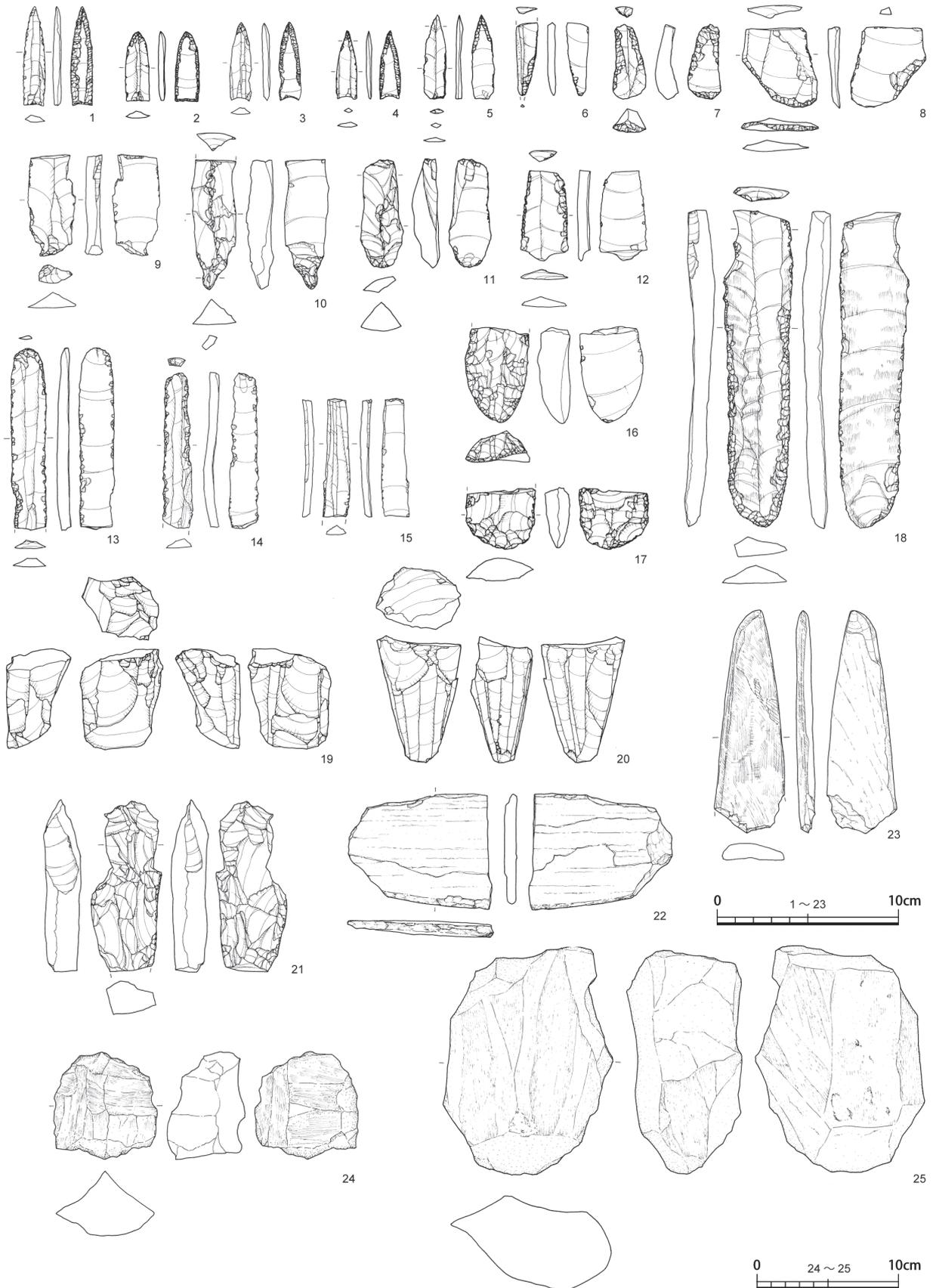


図13 湧別市川遺跡出土の石器群 (福田編2015)

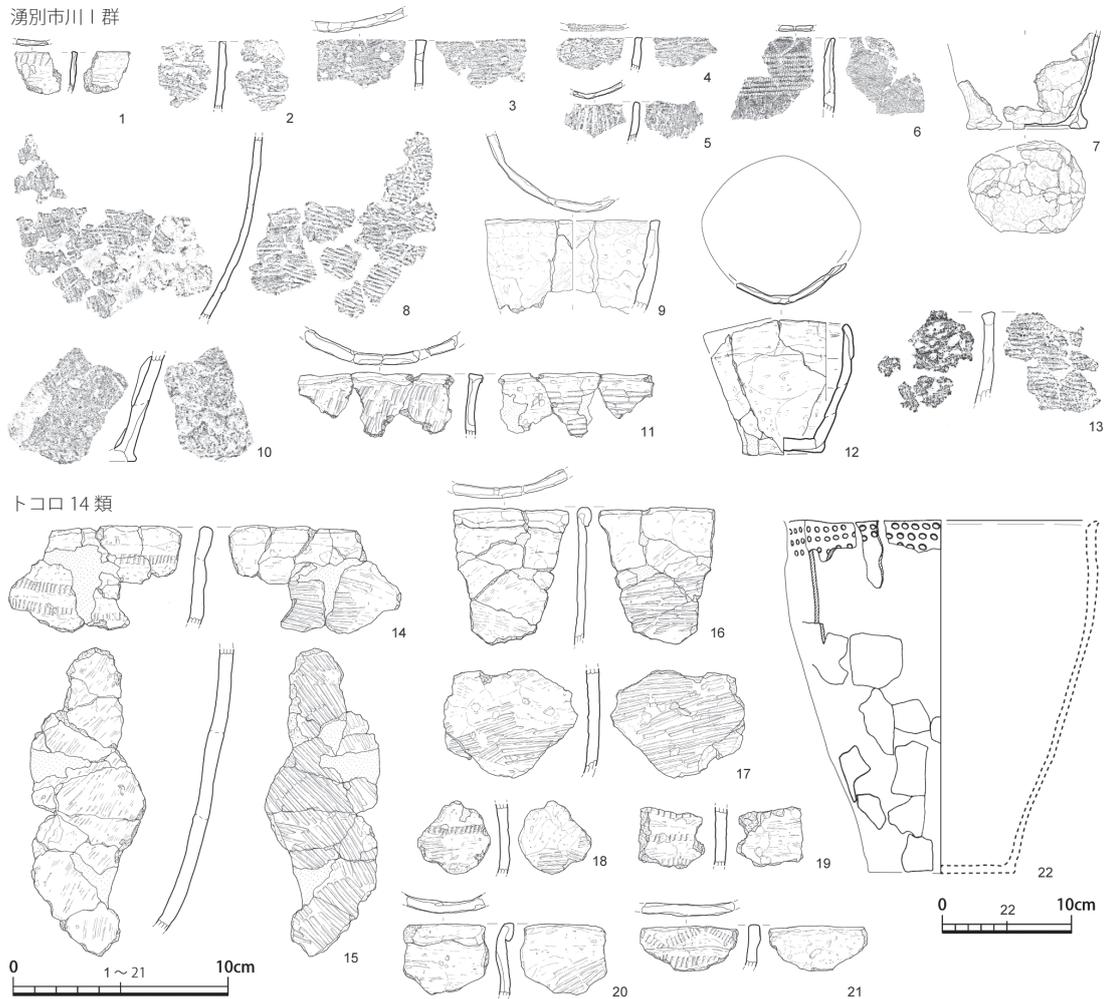


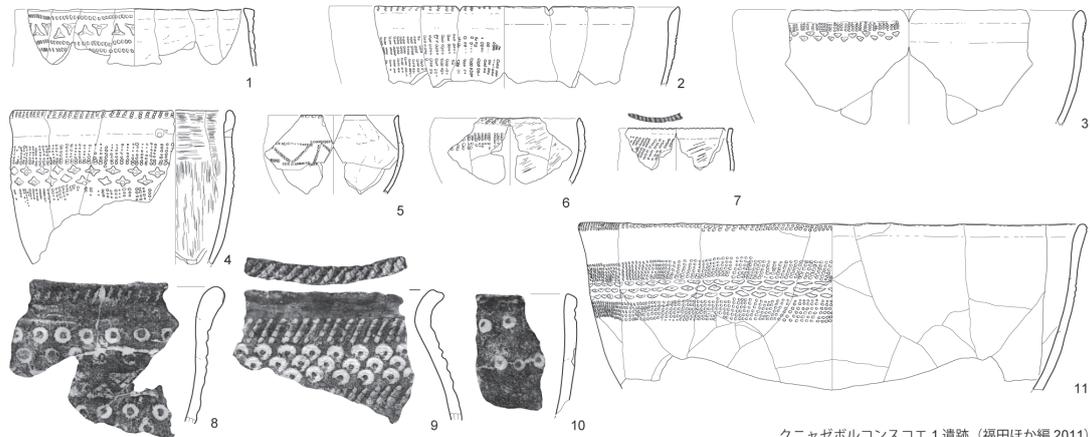
図14 湧別市川I群土器とトコロ14類土器（福田編2015）

式の外部起源説に新たな展開をもたらす可能性がある。個体数が少なく、遠距離にある遺跡を点と点で結んだ議論となるが、可能な範囲で並行関係の有無を考えてみる。

まず、型式的特徴を比較する。アドティモボ2群には、キザミを交互配置した口唇部文様と、短冊文を市松状配置した体部文様の施された小型深鉢がある（同図14）。この文様帯構成は女満別式と共通するが、器形・施文具は異なる。ほかに、円形文を複段配置した体部文様もある（同図16）。一見するとトコロ14類の竹管状文（図14-22）のように思われるが、アドティモボ2群の場合、押捺面がドーム状に凹んだ施文具で押された円形スタンプ文である。この形状はコンドン文化古段階にある（図15-8～10）。同図12・14の胴部の器面調整痕は、条痕文ではなく縦方向のヘラナデ痕である。このような調整痕は、道東でもアムール下流域でもみたことがない。胎土は砂質で、きめ細かい。これは、周囲の海成堆積土壌と関係するものであろう。

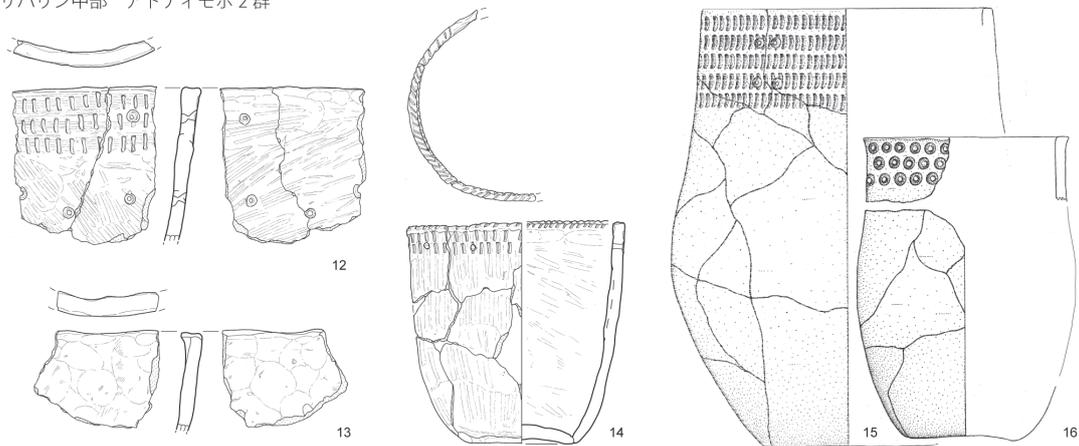
つぎに、各々の炭素年代を確認する。女満別式については、遺構出土木炭の年代値はないが、リザーバー効果の影響を考慮した土器附着物の炭素年代は7970-7645BPとされる【國木田2014】。大陸部で類似スタンプ文をもつ土器があるのは、アムール下流域コンドン文化古段階である（同図3・

アムール下流域 コンドン式古段階



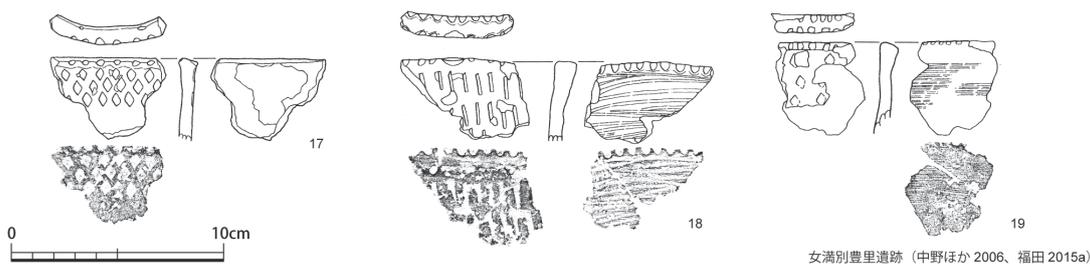
クヤゼボルコンスコエ 1 遺跡 (福田ほか編 2011)

サハリン中部 アドティモボ 2 群



アドティモボ 2 遺跡 (12～14: 福田ほか 2015a、15・16: ヤンシナほか 2012)

北海道東部 女満別式



女満別豊里遺跡 (中野ほか 2006、福田 2015a)

図15 女満別式土器と関連資料

4・11 など)。筆者らが調査した包含層出土木炭と國木田によるリザーバー効果の影響を考慮した土器附着物の年代から、ca.7600-6500 BPとなる(表1参照:[福田ほか編 2011])。アドティモボ 2 群については、土器を伴う遺構出土木炭の年代が7380-7359BPとなり、リザーバー効果を考慮した附着物の年代も整合的である[福田ほか 2015a]。年代幅は女満別式がもっとも古い、女満別式の年代は測定数が少なく、実際のところ不確定である。コンドン文化古段階の上限年代はca.8000BPまでさかのぼる可能性がある。アドティモボ 2 群の場合、目的を絞った遺構検出と年代測定を行っているが、事例を増やして信頼性を高める必要がある。ただし全体的に7000BP台にあるので、三者

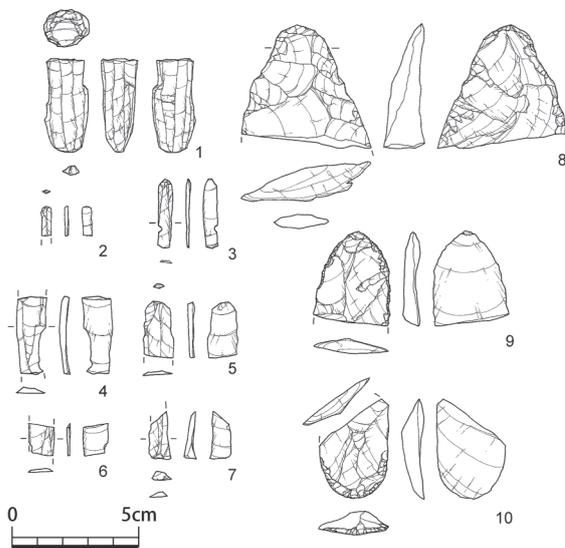


図16 アドティモボ2遺跡出土石器 (福田ほか2015a)

ともひとつの土器文化系統に含まれる可能性は否定されない。

現状では、サハリン中部(アドティモボ2群)と道東(女満別式)との間となるサハリン南部や道北に、類例が皆無である。またアド・ティモボ2群には、地元石材の赤色ジャスパーを用いた細石刃・尖頭器・削器・搔器はあるが、石刃鏃はない [図16: 福田ほか2015a]。

現状でわかることから総合的に判断して、アドティモボ2遺跡は北海道側とは異なり、むしろアムール側に近いといえる。だが、佐藤 [1964] の指摘から40年以上たった今も、女満別式の前段階に置くべき型式群は北海道にも東北にもない。むしろ、サハリンやアムール

下流域で近い年代値を有する類例が増えている。女満別式の成立母体をサハリン側に求めることを否定する材料はないので、サハリン中部と道東との間に中間をつなぐ未詳のコンテクストが存在すると予想する。

4-5 気候変動と石刃鏃文化集団の適応形態

道東の石刃鏃文化の炭素年代は、世界的な寒冷期8.2ka イベントとほぼ重なる。このことが、寒冷化に伴う大陸・サハリンからの移住・植民説を後押ししてきた [山原2008, 森先2014, 安斎2014]。移住・植民の有無はともかく、寒冷化がサハリンからの南下現象の要因となったことに関しては、基本的に賛同する。ただし、従来の指摘は、石刃鏃石器群が存続する時間内的変化を過小評価してきた。

道東の石刃鏃文化の存続期間は、ca.7500-7000BPという数百年間であるとされ [國木田2014, 國木田ほか2007など]、その暦年較正年代はca.8400-7800 cal BPとなる。近年のグリーンランドアイスコアによる古気候分析から、8.2 ka イベントの期間は非常に短かったと指摘されており、ca.150-160 yrとする報告もある [Kobashi et al. 2007, Thomas et al. 2007など]。宮崎・金子 [2015] が、千葉県市原市天神台遺跡における早期条痕文期の竪穴住居と炉穴の関係を追究した。安斎 [2016] は、その変遷のなかに8.2ka イベントの短さを読みとった。仮に、この時間幅が道東にも適用できるとすると、石刃鏃文化の存続期間のなかに、寒冷期と重ならない時期が相当あることになる。

道東の石刃鏃文化期の気候環境に関する遺跡調査データがある。湧別市川遺跡1972年調査 [木村編1973] で行われた泥炭層の花粉分析結果 [五十嵐・熊野1973] は、2013年調査TP2の基本層序Ⅲ層に相当する時期が、寒冷化のピークにはなく、温暖化傾向にあることを示す [木村1999, 大貫⁽¹⁸⁾2015a]。また、2013年調査TP2では、竪穴床面、墓坑埋土から建築材あるいは薪炭材とみられる木炭が多量に出土した。植田 [2015] の無作為抽出による樹種同定 (n=63) で検出されたのは、コナラ節・トリネコ属・ヤナギ属・カエデ属・オニグルミ・ノリウツギ・キハダ・ヤマブドウなど14分類群である。すべて広葉樹であり、針葉樹はまったくない。寒冷環境下でも集落周辺に広葉樹が

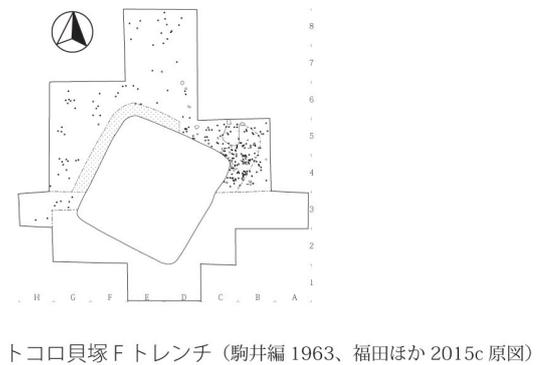
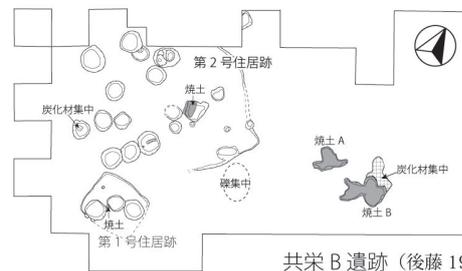
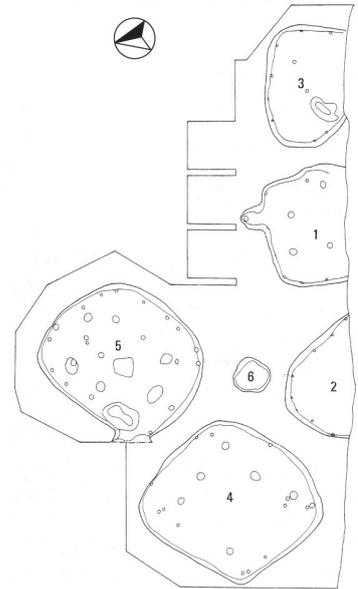
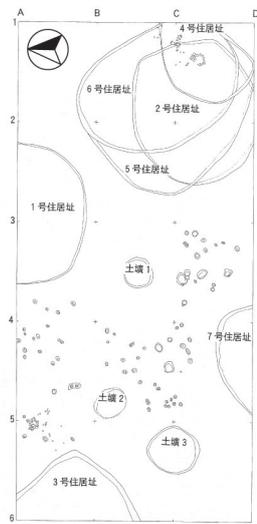
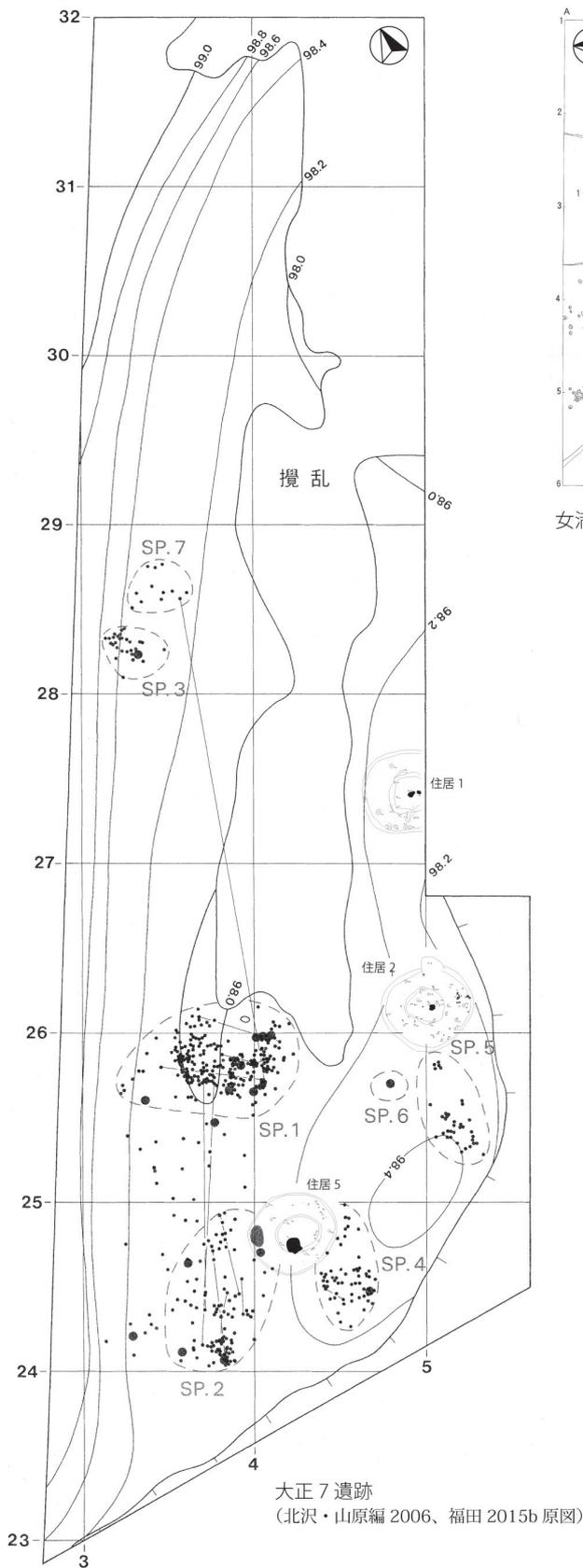


図17 石刃鎌文化期の集落

残り、それを利用した可能性がある。だが本遺跡には、温暖環境のなかにあったと考えられる道東太平洋沿岸を中心にひろがったテンネル・暁式期の集落構造の延長線上に位置づけるのが適切な、堅穴や墓坑を伴う定着性の高い集落構造がある [福田 2015b・2015e]。

本遺跡の1967年調査では、TP2から西に約40m離れた地点（「東地区」）で隅丸方形堅穴と土坑群が検出された（図11参照：[北海道大学文学部附属北方文化研究施設 1967]）。この地区の出土土器（図14-11～13）は、湧別市川I群の範疇にあるが、口縁部肥厚帯（折返し口縁）が特徴的である。筆者はこれをb2類とし、TP2出土土器（同図1～10：a・b1・c類）より一段階新しいと考えた [福田 2015a]。つまり、本遺跡の集落存続期間は比較的長かった可能性がある。複数軒の堅穴住居と各種土坑からなる集落は、ほかに、網走地方の女満別豊里・トコロ貝塚、道東太平洋沿岸の大正7・浦幌町共栄B・標茶町二ツ山でも発見されている（図17参照）。周辺に生育する樹木を積極利用したといえる木炭の出土例も、よく認められる。

山田 [2013] は、石刃鏃石器群を用いる集団の動きを石材調達効率の面から読み取り、石刃製作にともなう長時間の作業時間に適した生活・居住拠点が黒曜石産地から離れて存在したと指摘する。湧別市川遺跡TP2の石器分析では、氏の指摘を追認した [森先ほか 2015：54-55]。後期旧石器的な行動はすでにない。定着的な縄文集落のなかで、労力と時間のかかる石器生産作業が日常的に行われたと解釈する。

以上のことから、湧別市川遺跡の集落は、寒冷化のピークを過ぎた後の急激な温暖化のなかにあった可能性が高く、テンネル・暁式期以降の道東縄文早期生活構造の延長線上に位置づけられる。

4-6 気候変動と石刃鏃文化集団

最近の調査成果と筆者が得ている知見から、石刃鏃文化期の集団の適応形態について、以下のように考察する。

- a. 石刃鏃文化の前に沼尻式は、道北へ拡大する。この段階で、北海道—サハリン間の往来が活発化した可能性がある。上面方形の宗仁式は縄文土器的であるという意見がある [小林 2006 など]。大空町中央A遺跡 [米村編 1997] の沼尻式土器には方形が多く、宗仁式特有の口縁部突起の類例は沼尻式にある。そのため、石刃鏃期の前に、サハリン在地系（プロト宗仁式的一种）と道東沼尻式系とが、サハリンもしくは宗谷海峡周辺で接触した可能性がある。ここでできた関係性が、道東の石刃鏃文化が展開する基盤となったのではないか。サハリンではその後の在地変化を経て、縄文海進最盛期以降に新石器時代中期・宗仁式／文化が成立する。
- b. サハリン南部の新石器時代前期の石刃鏃石器群は、北海道産黒曜石に大きく依存する [Grishchenko 2011 など]。そのため、北海道産黒曜石の主な供給範囲であるサハリン南部から、石器製作技術とともに集団が南下したと考えるのが

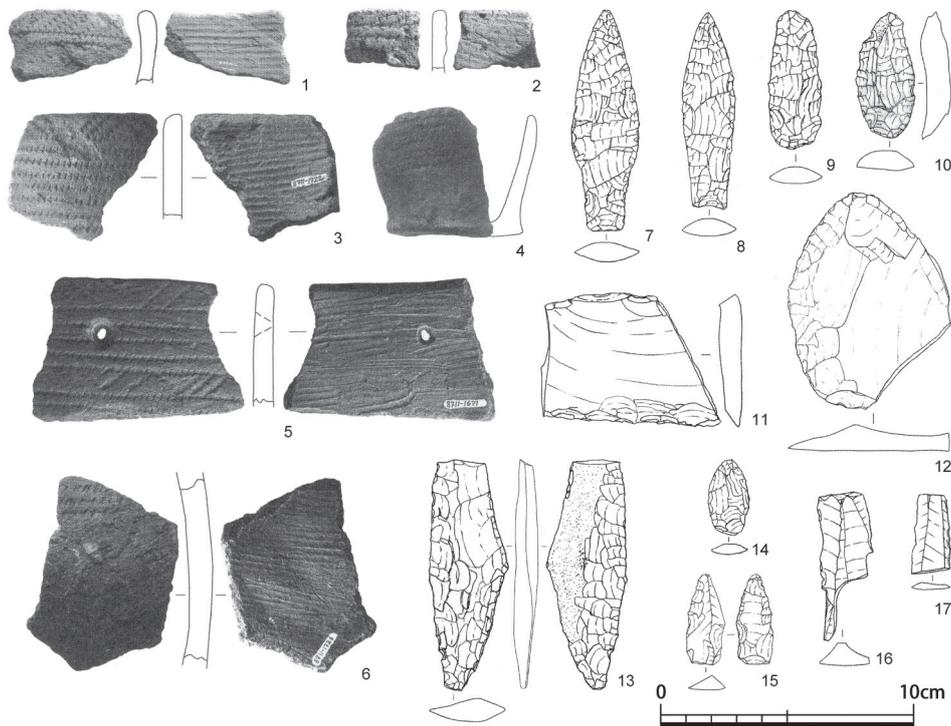


図19 択捉・ヤンキト2 遺跡出土遺物 (Shubina, Yanshina 2014)

適当である [佐藤 2015, 福田 2015e]。その背景に寒冷化があった可能性は否定されない。

c. 付着物の炭素年代が全体的に古い女満別式は、最初期の石刃鎌石器群とともに、他型式より古くから存在した可能性がある。ニツ山遺跡第1地点では、浦幌式と女満別式が共伴して出土した [澤 1968]。澤 [1969] は、女満別式の上面観が略楕円形であると指摘した。また、同遺跡第3地点 [豊原 1985] を調査した豊原 [2008a] は、女満別式のなかに無節の縄による「型押文」があることに注目した (図 18 参照)。これらは、女満別式に一般的な特徴ではない。ほかに、本遺跡資料の器形・器厚は浦幌式新段階 (後述) や東釧路式に近いという筆者の観察所見も添えておく。最初期以降も女満別式系統はのこったのではないか。

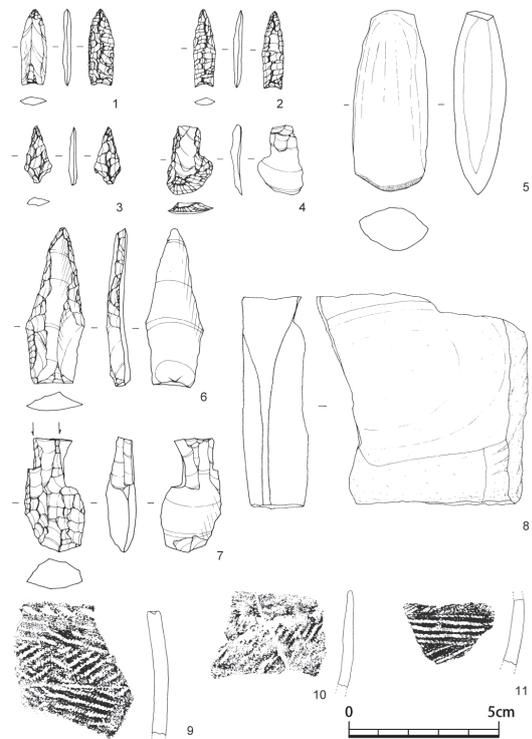


図20 嘉多山2遺跡の遺物集中 (A11・A12・B11・B12グリッド) 出土遺物 (和田・米村編1988)

- d. 湧別市川Ⅰ群・大正Ⅳ群期（古段階）は温暖化傾向にある。浦幌式は十勝地方を中心とした道東太平洋沿岸で成立し、古段階にオホーツク海沿岸へ進出した。後藤 [1991] のいう浦幌Ⅱ式は⁽¹⁹⁾ 型式的に古段階の一群より新しいので、浦幌式期は少なくとも新古2段階に分かれる。浦幌式土器は、根室のトーサムポロ湖周辺堅穴群 [三浦ほか 2015 など]、択捉のキトボエⅠ [Chantsev, Fetisov 1989]・ヤンキト2 [Shubina, Yanshina 2014]・クイブウシェフカ川 [Yanshina, Shubina 2015] 遺跡で出土している。それらの存在は、温暖化に伴う道東集団の領域拡大を意味すると考えられる。
- e. 木村 [1999] が注目するように、択捉では、浦幌式に両面調整石器を伴う例が散見される。Shubina, Yanshina [2014] によると、ヤンキト2遺跡では、共伴石器の石材は安山岩・玄武岩が圧倒的多数を占め（図19-7~13）、黒曜石はごくわずかである（同図16・17）。また、道東の東釧路Ⅱ式開始期に近い年代（ca.6895-7045BP）が報告されている [Yanshina, Kuzmin 2010]。ここには、黒曜石を調達する石刃鎌石器群の技術を放棄した浦幌式集団による適応形態があった可能性が高い。
- f. 道東における石刃鎌の導入のきっかけは、寒冷化に伴うサハリン由来の技術習得にあったと考えられるが、温暖化後も継続して使われた。東釧路Ⅱ式期以降は、太平洋沿岸でもオホーツク海沿岸でも減少・変形したと指摘される [山原 2008, 高倉 2013]。網走市嘉多山2遺跡 [和田・米村編 1988] の遺物集中（図20）のなかには、東釧路Ⅱ式土器とともに通常石刃鎌とは異なる特徴的な石鎌（同図1）が含まれる [米村 1988]。各地域の要請に応じて技術が徐々に消えていった可能性が高いので、その消滅期を厳密に区切る必要はないと考える。

⑤……………縄文集団による北方寒冷環境適応

テンネル・曉式期も石刃鎌文化期も、基本的には、縄文海進最盛期以降の道東における縄文文化の北方適応形態と同様の脈絡にある。8.2ka寒冷化イベント前後の環境変化は、オホーツク海岸地域での極端な動きを誘発させる要因となり、その結果が、道東の石刃鎌文化として、他地域の縄文文化より際立って見えるのではないか。温帯性定着民が南方へ撤退せず、一時的な寒冷環境、つまり異常事態を乗り切り、その後の温暖化に適応した軌跡をよみとる。

北太平洋沿岸の先史海洋環境適応に関する超域／通文化的研究が、日米加露4カ国間で進められてきた [Fitzhugh, W. ed. 1975, Yesner 1980, 岸上編 2015 など]。日本では主に、北海道周辺の海域環境における続縄文期以降の様相が、北米の事例との比較の対象になってきた。筆者のいう北方寒冷地における縄文集団による適応モデル、つまり縄文文化の北方適応形態は、オホーツク海沿岸という適応困難な地域への進出をその動機や適性から捉える点で、Yesner [1998] や Fitzhugh, B [2002・2004] が議論する海洋適応モデルと対比することができる。

ただし、道内に存在する北方寒冷環境において無理のない生活基盤が安定化したのは、遺跡数が飛躍的に増加する続縄文期以降である。これは、適応というよりはむしろ順応と呼ぶべきなのかもしれない。続縄文期以降の亜寒帯性の環境下に認められる活動モデルは、北太平洋沿岸の寒帯・亜寒帯または極北の環境下で認められる相似モデルと比較可能である。縄文時代の北方適応形態とは

区別した議論が必要とされる。

【謝辞】本稿執筆に際し、日露両国の方々にお世話になった。とりわけ、以下の方々との議論で得られた知見が本稿の骨子となっている。記して感謝申し上げたい（敬称略、五十音順）。

安斎正人、宇田川洋、内田和典、大貫静夫、菅野智則、木村英明、國木田大、熊木俊朗、Grishchenko V. A., 佐藤宏之、Shevkomud I. Ya. (故人)、西脇対名夫、高倉純、高瀬克範、豊原熙司、前田 潮、溝口孝司、宮本一夫、森先一貴、山浦清、山田康弘、山原敏朗、山田哲、Yanshina O. A., 横山英介、Vasilevskij A. A.

註

(1)——ロシア極東考古学におけるpaleometal epochの設定経緯は福田[2009]参照。

(2)——断りがないかぎり、本稿では未校正の放射性炭素 (^{14}C)年代を用いる。ここでは、近年のロシア極東における研究動向を踏まえ、2016年3月時点で筆者が妥当と判断した年代幅を示す。アムール下流域における近年の研究動向は福田[2014]参照。

(3)——サハリン新石器時代に関する近年の研究動向は福田[2014]参照。

(4)——南千島における近況については、Grishchenko V. A., Vasilevskij A. A., Yanshina O. V., Shubina O. A. 各氏からご教示を受けた。

(5)——本稿では、シユムシユ(占守)島～パラムシル(幌筵)島を北千島、オネコタン(温弥古丹)島～ウルップ(得撫)島を中千島、択捉島以南を南千島とする(図1参照)。

(6)——яшма=jasperと現地と呼ぶ石材を、赤色ジャスパールと訳す。Rozhdestvensky [1986]によると、原産地が位置するEast Sakhalin Zoneは全体的に遠洋性堆積物であるため、岩石名はチャートであろう。

(7)——Phillips, Speakman [2009]は、シアシユコタン島ドロブニエ遺跡の続縄文文化層(1600-1470 BP)出土黒曜石をすべてカムチャツカ産とした。出土土器と共伴関係にあれば、中・北千島に進出した道東・南千島の続縄文集団がカムチャツカ産黒曜石を入手したといえる。ただし、出土状況に関する所見が未報告のため、それ以上追究できない。

(8)——考古学的現象から求められる地域性は、植物地理学的区分と一致しない。他の資源環境や地形などが関係し、石狩低地帯(道央)周辺に緩衝地帯が存在する。

(9)——道東オホーツク海側の前・中期に形成された貝塚として、ほかに、網走市浜藻琴神社遺跡[米村編1988]

や北見市常呂町栄浦第二・KK44・TK50遺跡[武田2006]などがある。

(10)——なお、豊原[2008b]は、オホーツク海沿岸では細岡式と羅臼式が丸松式期まで残るとするが、筆者の議論はこのような傾斜編年ではなく、図4に示す北筒式土器の変遷[森2006を改変]を前提とする。

(11)——道東では、縄文時代を通じて土偶の数が極めて少ない。こうした全体傾向は、土偶に対する指向性・価値観が、道央以南とは異なる様態で、道東集団間に通底したことを暗示する。ところで、根室市初田牛20遺跡(図3-14:[根室市教育委員会編1989])において、栗沢式期の墓坑2基が発見された。坑口のそばからは土偶1点が出土した。破損しているが、全身が残る。坑内出土ではないが、葬送行為と関係する出土状況にある。縄文的生活構造に適さない根室半島において土偶を伴う葬送行為が存在したことには、注意を払う必要がある。ただし、これは不規則で局所的な事例である。

(12)——報告書によると、ケノマイ2遺跡の住居構造(壁面や床面)に道東側との違いがあるようにもみえる。

(13)——この資料は、Shkabenyov, V. V.氏が採集した。季刊考古学第125号の口絵「サハリンの前期新石器文化と縄文文化」のなかで、「ホタテガイを製作台とした土器」として紹介された。Shkabenyov氏のご厚意により、ネベリスク郷土博物館で本遺跡採集資料を観察した。

(14)——伊東[1942]が宗仁式土器を設定した。宗仁文化は現在、サハリン新石器時代中期の気候最適期の開始とともにサハリン島で成立・展開したと考えられている[Vasilevskij 2008]。

(15)——略方形/略楕円形の上面形を有するため系統論的に宗仁式直前に位置づけられ、付着物の炭素年代幅がほかの新石器時代前期土器群と並行する一群のことを指

す。詳細は福田ほか [2015b :137]参照。

(16)——縄文早期に関するロシアでの発掘調査は、アムール下流域のヤミフタ遺跡、クニャゼボルコンスコエ1遺跡、サハリンのアドティモボ2遺跡、スラブナヤ5遺跡で行った。調査経緯や分析結果は、大貫・福田編 [2014]、福田ほか編 [2011・2014]、福田ほか [2015b]参照。

(17)——嘉多山式は、網走市嘉多山4遺跡 [和田・米村編 1993]の第I群土器を標式とする。和田 [1993]が型式設

定の必要性を示唆し、大貫 [2015b]が「トコロ13類」[駒井編1963]と同一の型式内容であると判断した。

(18)——石刃鎌文化期が冷涼気候から温暖気候への転換期にあたることは、藤本 [1979 :165]が指摘していた。

(19)——浦幌式のなかには東釧路Ⅱ式との差が微妙なものもある。浦幌式新段階とされるものの一部は、実際には東釧路Ⅱ式と並行する可能性が高い。

引用文献

- 相原淳一 2015.『東北地方における最古の土器の追究—1914.1.28-2011.3.11—』, 纂修堂。
- 安斎正人 2014.『気候変動と縄文文化の変化』, 同成社。
- 安斎正人 2016.「縄文時代像を変える—『縄文人の生活世界』補遺—」,『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』15, pp.3-24。
- 五十嵐八枝子・熊野純男 1973.「湧別市川遺跡における沖積世の古気候変動」, 木村英明 編『湧別市川遺跡』, pp.99-104, 湧別市川遺跡調査団・湧別町教育委員会。
- 石川貞治編 1896.『北海道序地質調査—鉱物調査第二報—』, 北海道庁。
- 伊東信雄 1942.「樺太先史土器編年試論」,『喜田博士追悼記念國史論集』, pp.3-44, 大東書館。
- 今村啓爾 2010.『土器から見る縄文人の生態』, 同成社。
- 植田弥生 2015.「木炭の樹種同定」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』, pp.85-94, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 右代啓視・鈴木琢也・村上孝一・スコヴァツィーナ, V. M. 2008.「国後島の遺跡—古釜布郷土博物館所蔵資料より—」,『北方の資源をめぐる先住民と移住民の近現代史—2005-07年度調査報告—』, pp.161-182, 北海道開拓記念館。
- 宇田川 洋 1988.『アイヌ文化成立史』, 北海道出版企画センター。
- 大坂 拓 2010.「千島列島中部出土縄文・オホーツク土器の新資料—2007年KBP調査出土土器の概要報告—」, 熊木俊朗・高橋 健 編『千島列島先史文化の考古学的研究』東京大学常呂実習施設研究報告第7集, pp.61-74, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 大貫静夫 2008.「[文化]のある国と[文化]のない国」,『文化交流研究』21, pp.19-23, 東京大学文学部次世代人文学開発センター。
- 大貫静夫 2010.「縄文文化と東北アジア」, 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一 編『縄文時代の考古学1 縄文文化の輪郭(比較文化論による相対化)』, pp.141-153, 同成社。
- 大貫静夫 2014.「石刃鎌文化論と女満別式土器論の行方」, 大貫静夫・福田正宏 編『環日本海北部における完新世初頭の様相解明—「石刃鎌文化」に関する新たな調査研究—』, pp.1-7, 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・同新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻。
- 大貫静夫 2015a.「文化史考古学から見た北海道縄文時代早期環境変動に関する諸問題」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』, pp.111-131, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 大貫静夫 2015b.「トコロ13類について」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器／縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』, pp.149-153, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 大貫静夫・福田正宏 編 2014.『環日本海北部における完新世初頭の様相解明—「石刃鎌文化」に関する新たな調査研究—』, 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・同新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻。
- 大沼忠春 1999.「北海道地方 早期～晩期」,『縄文時代』10, pp.108-117。
- 大場利夫・奥野 寛 1960.『女満別遺跡』, 女満別町。
- 川内谷 修 編 2002.『ピタルバ遺跡』門別町埋蔵文化財調査報告書第10集, 門別町教育委員会。
- 川内谷 修 編 2015.『マウタサブ遺跡 ケノマイ2遺跡』日高町埋蔵文化財調査報告書第3輯, 日高町教育委員会。

- 北沢 実 編 1990.『帯広・八千代 A 遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告 8, 帯広市教育委員会。
- 北沢 実・山原敏朗 編 2005.『帯広・大正遺跡群 1』帯広市埋蔵文化財調査報告 26, 帯広市教育委員会。
- 北沢 実・山原敏朗 編 2006.『帯広・大正遺跡群 2』帯広市埋蔵文化財調査報告 27, 帯広市教育委員会。
- 加藤晋平 1963.「石刃鎌について」,『物質文化』1, pp.3-18。
- 岸上伸啓 編 2015.『環太平洋地域の先住民文化』国立民族学博物館調査報告 132, 国立民族学博物館。
- 木村英明 1976.「石刃鎌文化について」, 江上波夫教授古稀記念事業会 編『江上波夫教授古稀記念論集—考古・美術編—』, pp.1-27, 山川出版社。
- 木村英明 1988.「海峡・陸橋を越えて—シベリアと北海道の石器—」, 稲田孝司 編『古代史復元 1 旧石器人の生活と集団』, pp.169-179, 講談社。
- 木村英明 1999.「北東アジアにおける石刃鎌文化」平成 11 年度文部省科学研究費補助金特定領域研究 (A1) 研究成果報告書, 考古学資料集 6, 国際日本文化研究センター。
- 木村英明 編 1973.『湧別市川遺跡』, 湧別市川遺跡調査団・湧別町教育委員会。
- 吉良竜夫 1949.『日本の森林帯』林業解説シリーズ 17, 日本林業技術協会。
- 國木田 大 2014.「石刃鎌石器群の年代」, 大貫静夫・福田正宏 編『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明—『石刃鎌文化』に関する新たな調査研究—』, pp.25-34, 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・同新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻。
- 國木田 大 2015.「湧別市川遺跡の放射性炭素年代測定と炭素・窒素同位体, C/N 比分析」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器/縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』, pp.78-84, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 國木田 大・吉田邦夫・伊藤慎二・小林達雄・藤本 強 2007.「石刃鎌文化に関する年代学的検討」,『第 8 回北アジア調査研究報告会発表要旨』 pp.63-66, 同実行委員会。
- 熊木俊朗 2008.「続縄文期における北方文化の構図—日本列島の北方地域における土器文化の配置と地域区分—」, 明治大学文学部考古学研究室 編『地域と文化の考古学Ⅱ』, pp.39-54, 六一書房。
- グリシェンコ, V. A. (福田正宏 訳) 2015.「続縄文文化の一部としての北サハリンのカシカレバグシ文化」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器/縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』, pp.169-184, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 後藤秀彦 1976.『共栄 B 遺跡—北海道浦幌町共栄 B 遺跡発掘調査報告書—』浦幌町教育委員会。
- 後藤秀彦 1991.「浦幌式土器について」,『十勝考古学とともに—一少壮の考古学研究者佐藤訓敏君を悼む—』, pp.29-42, 十勝考古学研究所。
- 後藤秀彦・山原敏朗 2008.「条痕文系平底土器 (道東地域)」, 小林達雄 編『総覧 縄文土器』, pp.60-65, アム・プロモーション。
- 小林 敬 1985.『ピラオツマッコウマナイチャシ遺跡』, 美幌町教育委員会
- 小林達雄 2006.「フゴッペ洞窟壁画の原郷土」,『北方博物館交流—北海道北方博物館交流協会誌—』 18, p.1。
- 駒井和愛 編 1963.『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 上巻』, 東京大学文学部。
- 佐藤達夫 1964.「女満別式土器について」,『ミュージアム』157, pp.22-26。
- 佐藤宏之 2015.「北海道の石刃鎌石器群と石刃鎌文化」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器/縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』, pp.102-110, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 佐藤宏之・クズミン, Y. V.・グラスコック, M. D. 2002.「サハリン島出土の先史時代黒曜石石器の原産地と黒曜石の流通」,『北海道考古学』38, pp.1-13。
- 澤 四郎 1968.「釧路地方における石刃鎌の編年の位置—伴出土器を中心に—」,『釧路市史会報』2-3, pp.12-17, 釧路市役所釧路市史編さん事務局。
- 澤 四郎 1969.「道東における早期縄文土器編年について」,『釧路史学』1, pp.15-26, 北海道教育大学史学研究室。
- シュービン, V. O. 1990.「講演会『サハリン州の古代文化』」, 日ソ極東・北海道博物館交流協会 編『サハリン発掘の旅—樺太・風土と文化史的世界—』, pp.166-209, みやま書房。
- 高倉 純 1997.「石刃鎌石器群における石刃剥離技術—オタフク岩遺跡第Ⅱ地点出土石器群の分析から—」,『北海道考古学』33, pp.1-17。
- 高倉 純 1998.「北海道における石刃鎌石器群の研究—移動・居住形態の検討を中心に—」,『考古学研究』444, pp.55-78。

- 高倉 純 2001.「石刃鎌文化」, 野村 崇・宇田川 洋 編『新北海道の古代1 旧石器・縄文文化』, pp.86-89, 北海道新聞社。
- 高倉 純 2013.「石刃鎌石器群―「植民」と集団関係―」, 『季刊考古学』125, pp.37-40。
- 高橋英樹 2002.「千島列島の植物地理」, 『日本植物分類学会誌』2-1, pp.9-18。
- 武田 修 2006.『日本の遺跡13 常呂遺跡群』, 同成社。
- 田端英雄 2000.「日本の植生帯区分はまちがっている―日本の針葉樹林帯は亜寒帯か―」, 『科学』70-5, pp.421-430。
- 手塚 薫 2010.「千島列島における先史文化の適応と資源獲得・流通の検討」, 『北海学園大学人文論集』46, pp.73-95。
- 常呂町郷土研究同好会 編 1991.『常呂町の遺跡と遺物』とこころ文庫7。
- 豊原熙司 1985.「標茶町二ツ山遺跡第3地点の調査」, 『続北海道5万年史』, pp.153-162, 郷土と科学編集委員会。
- 豊原熙司 1996.「北筒式土器の型式認識について」, 『北海道考古学』32, pp.35-47。
- 豊原熙司 2008a.「縄文早期」, 斜里町立知床博物館 編『しれとこライブラリー9 知床の考古』, pp.32-44, 斜里町・斜里町教育委員会。
- 豊原熙司 2008b.「縄文中期」, 斜里町立知床博物館 編『しれとこライブラリー9 知床の考古』, pp.68-76, 斜里町・斜里町教育委員会。
- 豊原熙司・坂井通子・松田 功 2010.『オライネコタン3・4遺跡』斜里町文化財調査報告XXXI, 斜里町教育委員会。
- 中野拓大・阿部昭典・渋谷賢太郎 2006.「北海道縄文時代早期女満別式主要資料の再検討」, 伊藤慎二・山添奈苗 編『東アジアにおける新石器文化と日本Ⅲ』21COE 考古学シリーズ6, pp.35-45, 國學院大學21世紀COEプログラム研究センター。
- 永谷幸人・松田宏介・吉田 力・福田裕二 2014.「北海道貝塚地名表」, 『日本考古学協会2014年度伊達大会研究発表資料集』, pp.1-44, 同実行委員会。
- 新美倫子 1990.「縄文時代の北海道における海獣狩猟」, 『東京大学文学部考古学研究室紀要』9, pp.137-171。
- 新美倫子 2013.「縄文時代の北海道における海獣狩猟の再検討」『動物考古学』30, pp.19-32。
- 西 幸隆 1997.「北海道東部における縄文早期前半の土器群―特にテンネル・曉式土器群について―」, 倉田芳郎先生古稀記念会 編『生産の考古学』, pp.21-33, 同成社。
- 根室市教育委員会編 1989.『初田牛20遺跡発掘調査報告書』。
- 野村 崇 1999.「北からの道―シベリア・サハリン・千島列島と北海道―」, 橋口尚武 編『海を渡った縄文人』, pp.65-94, 小学館。
- 林 欣吾 1953.「附篇 日本北地の古文化と種族」, ポインスキー(駐露日本公使館 訳)『ロシア人日本遠訪記』, pp.157-349, 内外社。
- フィッツヒュー, B.(佐々木史郎 訳) 2002.「北太平洋における海洋狩猟民の起源―コディアック島の事例から―」, 佐々木史郎 編『先史狩猟採集文化の新しい視野』国立民族学博物館調査報告33, pp.49-82。
- 福田正宏 2007.「極東ロシアの先史文化と北海道―紀元前1千年紀の考古学―」, 北海道出版企画センター。
- 福田正宏 2008.「縄文後期」, 斜里町立知床博物館 編『しれとこライブラリー9 知床の考古』, pp.111-116, 斜里町・斜里町教育委員会。
- 福田正宏 2009.「極東ロシア南部における農耕と金属器の受容」, 設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦 編『弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭(時間・地域・年代論)』, pp.52-67, 同成社。
- 福田正宏 2013.「北海道とサハリン・千島―日露二国の考古学からみた縄文文化の北辺―」, 『季刊考古学』125, pp.62-65。
- 福田正宏 2014.「サハリン・アムール流域」, 『北海道考古学』50, pp.137-150。
- 福田正宏 2015a.「湧別市川遺跡I群土器の型式内容」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器/縄文文化のプロセスに関する考古学的研究―湧別市川遺跡の研究―』, pp.63-75, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 福田正宏 2015b.「道東における石刃鎌文化の縄文集落」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器/縄文文化のプロセスに関する考古学的研究―湧別市川遺跡の研究―』, pp.210-215, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 福田正宏 2015c.「完新世日本列島北辺域における温帯性定着民の寒冷地適応史―北海道の縄文文化と「サハリン・ルート」―」, 高瀬克範 編『「サハリン・千島ルート」再考』(補訂版), pp.3-33, 北海道考古学会。
- 福田正宏 2015d.「東北アジアのなかの東北先史文化」, 阿子島 香 編『東北の古代史1 北の原始文化』, pp.204-231, 吉川弘文館。
- 福田正宏 2015e.「道東の石刃鎌文化―縄文研究の切り口から―」, 『季刊考古学』75, pp.75-78。

- 福田正宏 2017.「石刃技法を用いた北方縄文集団と 8.2ka 寒冷化イベント」, 安斎正人 編『理論考古学の実践—II 実践編—』, pp.116-137, 同成社。
- 福田正宏・グリシェンコ, V. A.・ワシレフスキー, A. A.・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・國木田 大・ペレグドフ, A. S.・内田和典・森先一貴・役重みゆき・夏木大吾・山下優介 2015a.「サハリン中部アド・ティモボ遺跡群の考古学的調査(2014年度)」, 『第16回北アジア調査研究報告会予稿集』, pp.35-42, 同実行委員会。
- 福田正宏・グリシェンコ, V. A.・ワシレフスキー, A. A.・大貫静夫・熊木俊朗・國木田 大・森先一貴・佐藤宏之・モジャエフ, A. V.・パシェンツェフ, P. A.・ペレグドフ, A. S.・役重みゆき・夏木大吾・高鹿哲大 2015b.「サハリン新石器時代前期スラブナヤ5遺跡の発掘調査報告」, 『東京大学考古学研究室研究紀要』29, pp.121-146。
- 福田正宏・熊木俊朗・國木田 大・大貫静夫 2015c.「トコロ14類土器とトコロ13類土器の再検討」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器/縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』, pp.132-148, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 福田正宏 編 2015.『日本列島北辺域における新石器/縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 福田正宏・シェフコムード, I. Ya.・熊木俊朗・内田和典 編 2011.『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告第9集, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 福田正宏・シェフコムード, I. Ya.・森先一貴・熊木俊朗 編 2014.『環日本海北回廊の考古学的研究(I)—ヤミフタ遺跡発掘調査報告書—』東京大学常呂実習施設研究報告第11集, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 藤本 強 1979.『北辺の遺跡』歴史新書17, 教育社。
- 藤本 強 編 1976.『トコロチャシ南尾根遺跡』, 北海道常呂町。
- 北海道大学文学部附属北方文化研究施設 1967.『北海道紋別郡湧別遺跡調査概報』
- 堀田 満 1974.『植物の分布と文化』, 三省堂。
- 三浦正人・越田雅司・愛場和人・広田良成 2015.『根室市トーサムボロ湖周辺堅穴群(1)』北海道埋蔵文化財センター調査報告書317, 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター。
- 宮崎朝雄・金子直行 2015.「縄文早期条痕紋期の堅穴住居と炉穴の関係—千葉県市原市天神台遺跡を中心として—」, 『縄文時代』26, pp.95-129。
- 森 岬子 2006.「北筒式土器について」, 『北方探究』8, pp.1-24。
- 森先一貴 2014.「ロシア極東における石刃鎌を伴う石器群」, 大貫静夫・福田正宏 編『科学研究費助成事業『環日本海北回廊の考古学的研究』研究集会 環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明—「石刃鎌文化」に関する新たな調査研究—』, pp.107-55, 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・同新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻。
- 森先一貴・役重みゆき・夏木大吾・尾田識好 2015.「(2) 石器」, 福田正宏 編『日本列島北辺域における新石器/縄文化のプロセスに関する考古学的研究—湧別市川遺跡の研究—』, pp.132-148, 東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻・同人文社会系研究科附属常呂実習施設。
- 山田 哲 2006.『北海道における細石刃石器群の研究』, 六一書房。
- 山田 哲 2013.「石材資源調達の経済学—石器インダストリーの空間配置と技術に関する考察—」, 『考古学研究』60-3, pp.56-76。
- 山田 哲・中村雄紀 2015.「トコロチャシ跡遺跡群出土の石刃鎌石器群について」, 熊木俊朗 編『トコロチャシ跡遺跡群(史跡常呂遺跡)整備に伴う発掘調査報告書』, pp.175-186, 東京大学大学院人文社会系研究科・北見市教育委員会。
- 山原敏朗 2005.「テンネル・曉式土器群を有する石器文化の成立と展開をめぐる一理解」, 広島大学大学院文学研究科考古学研究室 編『考古学論集』, pp.191-206, 川越哲志先生退官記念事業会。
- 山原敏朗 2006.「第4章 大正3遺跡の発掘調査」, 北沢 実・山原敏朗 編『帯広・大正遺跡群2』帯広市埋蔵文化財調査報告27, pp.11-235, 帯広市教育委員会。
- 山原敏朗 2008.「更新世末期の北海道と完新世初頭の北海道東部」, 佐藤宏之 編『縄文化の構造変動』, pp.36-52, 六一書房。
- 山原敏朗 2014.「北海道東部の縄文時代早期土器—前半の型式群について—」, 大貫静夫・福田正宏 編『環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明—「石刃鎌文化」に関する新たな調査研究—』, pp.35-40, 東京大学大学院人文

-
- 社会系研究科考古学研究室・同新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻。
- ヤンシナ, O. V.・ゴルブノフ, S. V.・クズミン, Y. V. (福田正宏 訳) 2012. 「サハリン新石器時代前期に関する諸問題—アド・ティモボ2遺跡—」, 佐藤宏之 編『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容 (I)』, 東京大学常呂実習施設研究報告第10集, pp.10-26, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設。
- 横山英介 1998. 「北海道における縄文文化の形成」, 野村崇先生還暦記念論集編集委員会 編『野村崇先生還暦記念論集 北方の考古学』, pp.29-66, 同論集刊行会。
- 米村哲英 編 1997. 『女満別町中央 A 遺跡発掘調査報告書』, 女満別町教育委員会。
- 米村 衛 1988. 「網走湖岸における嘉多山 2 遺跡について」, 和田英明・米村 衛 編『嘉多山 2 遺跡』, 網走市教育委員会。
- 米村 衛 編 1988. 『ナヨロの沢遺跡・浜藻琴神社遺跡— 一般国道 244 号網走市北浜防災工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』 網走市教育委員会。
- ワシレフスキー, A. A. (木村英明 訳) 1992. 「サハリン島の新石器文化 (概説)」, 『北海道考古学』 28, pp.115-136。
- ワシレフスキー, A. A. (福田正宏・熊木俊朗 訳) 2006. 「サハリン州コルサコフ地区オホーツコエ村「セディフ遺跡群」における新石器時代・初期鉄器時代・中世の考古学的文化複合」, 『北海道考古学』 42, pp.1-16。
- 和田英明 1993. 「嘉多山 4 遺跡出土の土器について」, 和田英明・米村 衛 編『嘉多山 3 遺跡 嘉多山 4 遺跡— 道網走端野線特殊改良第 1 種工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』, pp.300-303, 網走市教育委員会。
- 和田英明・米村 衛 編 1988. 『嘉多山 2 遺跡』, 網走市教育委員会。
- 和田英明・米村 衛 編 1993. 『嘉多山 3 遺跡 嘉多山 4 遺跡— 道網走端野線特殊改良第 1 種工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』, 網走市教育委員会。

英語

- Bond, G., Showers, W., Cheseby, M., Lotti, R., Almasi, P., deMenocal, P., Priore, P., Cullen, H., Hajdas, I., Bonani, G. 1997. A Pervasive Millennial-Scale Cycle in North Atlantic Holocene and Glacial Climates. *Science*, 278, pp.1257-1266.
- Craig, O. E., Saul, H., Lucquin, A., Nishida, Y., Tache, K., Clarke, L., Thompson, A., Altoft, D. T., Uchiyama, J., Ajimoto, M., Gibbs, K., Isaksson, S., Heron, C. P., Jordan, P. 2013. Earliest Evidence for the Use of Pottery. *Nature*, 496, pp.351-354.
- Fitzhugh, B. 2004. Colonizing the Kodiak archipelago: Trends in Raw Material Use and Lithic Technologies at the Tanginak Spring Site. *Arctic Anthropology*, 41-1, pp.14-40.
- Fitzhugh, B. 2007. The Kuril Biocomplexity Project—Second Annual Report: Cumulative for 2005-2007, University of Washington.
- Fitzhugh, B., Shubin, V. O., Tezuka, K., Ishizuka, Y., and Mandruk, C. A. S. 2002. Archaeology in the Kuril Islands: Advances in the Study of Human Paleobiogeography and Northwest Pacific Prehistory. *Arctic Anthropology*, 39 (1-2) , pp.69-94.
- Fitzhugh, W. (ed.) 1975. Prehistoric Maritime Adaptations of the Circumpolar Zone, Mouton.
- Kobashi T., Severinghaus J. P., Brook, E. J., Barnola J. M., Grachev, A. M. 2007. Precise Timing and Characterization of Abrupt Climate Change 8200 Years Ago from Air Trapped in Polar Ice, *Quaternary Reviews*, 26, pp.1212-1222.
- Kunikita, D., Shevkomud, I. Ya., Yoshida, K., Onuki, S., Yamahara, T., Matsuzaki, H. 2013. Dating Charred Remains on Pottery and Analyzing Food Habits in the Early Neolithic Period in Northeast Asia, *Radiocarbon*, 55, pp.1334-1340.
- Kuzmin, Y. V., Glascock, M. D. (eds.) 2010. Crossing the Straits: Prehistoric Obsidian Source Exploitation in the North Pacific Rim: BAR International Series, 2152, Oxford.
- Kuzmin, Y. V., Glascock, M. D., Izuho, M. 2012. The Geochemistry of the Major Sources of Archaeological Obsidian on Hokkaido Island (Japan) : Shirataki and Oketo, *Archaeometry*, 55-3, pp.355-369.
- Phillips, S. C., Speakman, R. J. 2009. Initial Source Evaluation of Archaeological Obsidian from the Kuril Islands of the Russian Far East Using Portable XRF, *Journal of Archaeological Science*, 36, pp.1256-1263.
- Rozhdestvensky, V. S. 1986. Evolution of the Sakhalin Fold System, *Tectonophysics*, 127, pp.331-339.
- Thomas, E. R., Wolff, E. W., Mulvaney, R., Steffensen, J. P., Johnsen, S. J., Arrowsmith, C., White, J. W. C., Vaughn, B., Popp, T. 2007. The 8.2 ka Event from Greenland Ice Cores, *Quaternary Science Reviews*, 26, pp.70-81.

- Vasilevski, A. A., Grischenko, V. A., Orlova, L. A. 2010. Periods, Boundaries, and Contact Zones in the Far Eastern Insular World of Neolithic, *Archaeology Ethnology & Anthropology of Eurasia*, 38-1, pp10-25.
- Yanshina, O. V., Kuzmin, Y.V. 2010. The Earliest Evidence of Human Settlement in the Kurile Islands (Russian Far East) : The Yankito Site Cluster, Iturup Island. *The Journal of Island and Coastal Archaeology*, 5, pp.179-184.
- Yesner, D. R. 1980. Maritime Hunter-gatherers: Ecology and Prehistory, *Current Anthropology*, 21-6, pp.727-750.
- Yesner, D. R. 1998. Origins and Development of Maritime Adaptations in the Northwest Pacific Region on North America, *Arctic Anthropology*, 35-1, pp.204-222.
- ロシア語
- Chantsev, O. A., Fetisov, A. V. (Чанцев, О. А., Фетисов, А. В.) 1989. Некоторые результаты осмотра археологических памятников центральной части западного побережья о. Итуруп, Исследования по археологии Сахалина и Курильских островов, II: тезисы выступлений на II археологических чтениях, посвященных памяти Р. В. Козыревой 8-9 декабря 1989 г., Всероссийское общество охраны памятников истории и культуры, Южно-Сахалинск: Сахалинское областное отделение, С. 30-31.
- Deryugin, V. A. (Дерюгин, В. А.) 2007. Предварительные результаты исследования на памятнике Ясное-8 Тымовского района в рамках проекта Сахалин-2, Отв. ред. Кумаки, Т., Фукуда, М., Археологические исследования переходного периода от неолита к железному веку на Дальнем Востоке России, Китами: Исследовательская лаборатория Токоро Токийского университета, С. 39-47.
- Deryugin, V. A. (Дерюгин, В. А.) 2010. Керамика тымского типа и вопросы классификации, периодизации керамических комплексов эпохи палеометалла Сахалина, Отв. ред. Клюев, Н. А., Вострецов, Ю. Е. Приоткрывая завесу тысячелетий к 80-летию Жанны Васильевны Андреевой. Владивосток.: Институт истории, археологии и этнографии народов Дальнего Востока, С. 246-258.
- Golubev, V. A., Lavrov, E. L. (Голубев, В. А., Лавров, Е. Л.) 1982. Сахалин в эпоху камня. Новосибирск: Наука.
- Grishchenko, V.A. (Грищенко, В. А.) 2011 Ранний неолит острова Сахалин. Южно-Сахалинск: изд-во Сахалинского государственного университета.
- Samarin, I. A., Shubina, O. A. (Самарин, И. А., Шубина, О. А.) 2013. Памятники истории и культуры Южино-Курильского района. Южно-Сахалинск: Министерство культуры Сахалинской области, Сахалинский областной краеведческий музей.
- Shubina, O. A., Zhushchikovskaya, I. S. (Шубина, О. А., Жушиховская, И. С.) 1986 К вопросу о выделении локальных культур в неолите Северного Сахалина (по материалам керамических традиций). XXVII съезд КПСС и задачи музейного строительства в Сахалинской области (Препринт), Отв. ред. В. О. Шубин: С.16-18. Южно-Сахалинск: ИМГиГ ДВНЦ АН СССР, Сахалинский областной краеведческий музей.
- Shubina, O. A., Yanshina O. V. (Шубина, О. А., Яншина, О. В.) 2014. Предварительные итоги археологического исследования поселения Янкито-2 на о. Итурупе в 2013 году. Вестник Сахалинского музея, 21, С. 3-56.
- Shubina, O. A., Yanshina, O. V. (Шубина, О. А., Яншина, О. В.) 2015. Новый археологический памятник в устье рекикуйбышевки на острове Итуруп, Вестник Сахалинского музея, 22, С. 50-69.
- Vasilevskij, A. A. (Василевский, А. А.) 2008. Сони: культура среднего неолита на острове Сахалин. Неолит и неолитизация бассейна Японского моря: человек и исторический ландшафт: Материалы международной археологической конференции, посвященной 100-летию со дня рождения А. П. Окладникова. Владивосток: изд-во Дальневосточного университета, С.36-48.
- Vasilevskij, A. A., Grishchenko, V. A. (Василевский, А. А., Грищенко, В. А.) 2014. Сырьевые центры и сырьевой обмен в эпоху камня и палеометалла на Сахалине и Курильских островах, Россия и АТР, 2014-2, С.114-126.
- Vasil'evskij, L. S., Golubev, V. A. (Васильевский, Л. С., Голубев, В. А.) 1976. Древние поселения на Сахалине. Новосибирск: Наука.

(九州大学埋蔵文化財調査室, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2017年3月17日受付, 2017年7月31日審査終了)

Jomon Cultural Adaptations to the Northern Environment

FUKUDA Masahiro

The Jomon culture is one of the Far East Neolithic cultures, which adapted to the “miniature garden” world formed by the temperate humid climate and mountainous landscapes of the Japanese Archipelago. The people of the Jomon culture tended to settle in habitable areas just beyond the northern border of the temperate zone of the Japanese Archipelago due to difficulties in adapting to the cold climate. The Jomon population were not willing to expand northward into cold climate areas that were difficult to inhabit unless the living environment met their needs. Among such cold areas, the Jomon population found it worth their while to settle in northeastern Hokkaido because it was rich with marine resources and stones; however, the extreme weather conditions in the Okhotsk coast made it difficult for them to maintain the same lifestyle as in temperate areas and left many no choice but to withdraw from the area. In addition, some of the Jomon population are likely to have expanded into Sakhalin and the Kurile Islands when these areas became habitable as a result of the expansion of the temperate zone, but during the period of the early Holocene to the final Jomon they did not long term settle there as they could not change their lifestyle or adapt sustainably to the different ecosystem. The closer to the subarctic zone they got, the more difficult it became to fulfill the living needs of the Jomon population. In brief, it was extremely risky for them to expand into the subarctic zone in the northern boundary region of the Japanese Archipelago.

Key words: Jomon culture, Hokkaido, Russian Far East, adaptation to the cold climate, environmental changes